

青衿

第五十号

TMU 文藝部

青衿

第五十号

東京都立大学

文藝部

○部長挨拶

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。文芸部部長の西川と申します。

この度は青衿をお読みいただき誠にありがとうございます。

今年度の青衿新歓号はコロナウイルスの影響により、インターネット上での公開という形をとることになりました。

私たち文芸部は、小説の執筆を主な活動内容としており、部員たちが書いた作品を集めた部誌を年に4回発行しています。部誌には短編読み切りを掲載する『青衿』、長期連載を行う『ゆえ』、不定期発行の『Freasy』の3種類があります。その他の活動として、大学祭での展示、合宿、月1回の「本を読む会」なども行っています。「本を読む会」では、ビブリオバトルや三題噺、お勧めの本紹介など部員が持ち込んだ様々な企画を行っています。

本を読むことが好きな人、今まで小説を書いたことがないけれど興味がある人、もちろん高校で文芸部だったという人どのような方でも大歓迎です。この冊子を読んで興味を持ってくださった方はぜひ新学期にお気軽に文芸部の部室へ足をお運びください。学生ホール4階424室にてお持ちしております。

今回も様々なジャンルの素敵な作品が掲載されています。ぜひ、ごゆっくりお楽しみください。また最後に部員紹介も掲載しておりますので、そちらも小説と合わせてお読みいただくとさいわいです。

皆様にお会いできることを部員一同とても楽しみにしています。

文芸部部長 西川知里

○青衿（せいぎん）とは○

《「詩経」鄭風・子衿の「青青たる子が衿」の句の注「青衿は青い領なり、学子の服するところ」から》学生のこと。

— 『大辞林』第二版・小学館より

東京都立大学文芸部公式ホームページ：<http://tmubungei.ninja-web.net/>

連載誌『ゆえ』バックナンバー『語り月夜』：<http://tmubungei-yue.seesaa.net/>

東京都立大学文芸部 Twitter：東京都立大学文芸部 @tmulc

○目次○

部長挨拶 3
もう二度と会えない	大塚慎太郎 5
桜の絵	風影露 8
星に種播く	深山わたる11
キャンパス・ツアー	紺野透26
無重力少女	深山わたる34
部員紹介46
奥付48

もう二度と会えない

大塚慎太郎

高校生割引、使えるうちに使っておきたい。
そう言い出したのはマコだった。

「何よ、藪から棒に」

「そう唐突なことでもないよ。見たでしょ、さっきの料金表。高校生と大学生じゃんで違う。場所によっては大学生が学生じゃないときもあるし」

彼女の言うことはなんら間違っていないかった。私たちは今、大きな特権を失おうとしている。

クラスでの打ち上げの最中、カラオケの一室で私たち四人は次に会う予定を立てた。なんてことない遊びの予定を立てるように。三十人余りが詰め込まれた個室の隅で、秘め事を囁くように。暗がりになつて、見つからないように。

人気者が流行りの歌を熱唱するのを聞きながら、委員長が別れの歌を入力するのを横目で見ながら、私たちは再会の約束を交わした。

「やっぱり高校生は安い」

会計のときにもまた、マコはそう言った。学生証を握りしめ、大学生になりたくないと言った。

「あんなに頑張ったのに、行きたくないの？」

「それとこれとは別問題でしょー」

彼女の隣で千花ちゃんがうんうんと頷く。

「美味しいご飯はお腹いっぱいでも食べたい、みたいな」

「その例えはおかしい」

店を出ると、外はもう暗かった。クラス内カップルが気まずそうな顔で手を合わせる。冷やかしの声が飛んだ。どこからか、すすり泣きが聞こえる。伝染病のようにそれは広がった。

思えば仲のいいクラスだった。学生の打ち上げとしては珍しく、誰一人欠けることなく参加している。涙の波に乗れない私の横で、依田

がいたずらっ子のように笑う。

「みんな、センチメンタルだね」

私たち四人は波の中で、小さな舟に揺られていた。三月二十日行きの小舟に。

良く晴れた日に、私は動物園に来ていた。人ごみの中で、頭一つ飛び出たマコが手を振っているのが見える。駆け寄ると、私が最後だった。久しぶりに見る三人の私服姿。一人だけ花粉症持ちの依田が、マスクに眼鏡にイヤーマフと完全装備だというのに、さつきから鼻をかむ手に休む様子がない。鼻をかむためにマスクを外しているから、余計悪化しているようにも見える。動物園に行こうと言いだしたのは、当の依田だった。この歳にもなつて、と思うか、この歳だからこそ、と思うかは個人の自由と言っていた。

「マコ、動物園来るの十年ぶりだよ」

指折り数えれば私もそれくらいだった。依田が同意する横で、千花ちゃんにはにかみながら静かに年間パスポートを見せてきた。

涙交じりの声で依田が叫ぶ。

「年パス持ってんじゃ高校生でも変わんないじゃん！ 言つてよ、別のところにしたのに！」

「でもここつて、そもそも大学生も学生に含まれてるよ……？」

千花ちゃんに言われてチケット売り場を確認すると、確かに小人（大学生まで）とある。

「ちゃんと確認しろよ、依田！」

「依田！」

「これ依田が悪いの？ そうなの？」

糾弾された依田は縮こまりグズグズと鼻をすすった。

千花ちゃんの前導は年パスに恥じないスムーズさだった。一通り目玉となる動物を周ったら、陽の当たるレストランでお昼、その後は少し珍しい虫や鳥を見た。

「ここはね、鳥にも名前をつけてるの。珍しいでしょ。普通はライオンとかだけなのに」

タグで見分けができない私たちに、千花ちゃんはいくつか個体の特徴を教えてくれる。種族名も知らない鳥に付けられた固有名詞を、さらさらと諳んじる千花ちゃんに、私たち三人はただただ感心するばかりだ。

鳥が好きらしい千花ちゃんは、非常に熱の入った解説をしてくれた。それを聞きながら、じっと眺めていると、鳥にも鳥の特徴や関係性、性格みたいなものが見えてきた気がした。赤いタグのは他の個体より一回り小さい。青いタグとピンクのタグは仲が良くない。緑のタグはのんびり屋なのか、ずっと動かない。

かと思えば、急に飛び立ってピンクに喧嘩を仕掛けたので、もうよく分からなくなつた。鳥の思春期ということにしておこう。

「思春期かあ。あるのかな、鳥にも……」

帰りの電車を待つ間、私は千花ちゃんに話しかけた。

「知らなかったよ、こんなに動物園に詳しいなんて」

「言つてなかったもんね。世間は『この歳にもなって』だと思つてたから」

恥ずかしそうに千花ちゃんは言う。三年間一緒に過ごしても、知らないことがある。そのことに何だかむずがゆい気持ちでお腹がいっぱいになった。ホームに滑り込んだ電車に足を踏み入れたこの瞬間にも、マコか依田は、今この瞬間に踊り出しそうなほど電車が好きかもしれない。

私は、二人から聞き出す前に、自分の言つていなかったことを一つ話した。そのことが潤滑油となつて、二人の口からも「実は……」と。それを聞いて千花ちゃんからも。

オレンジ色の夕日をあびながら自分のことを話してくれる三人はきらきらと眩しかった。そして、三人の目に映る私も、きらきらと眩しかった。

いつの間にか、依田が降りる駅に着いて、千花ちゃんが降りる駅に着いて。二人になった後も私の口は急ぎ立てられるように動き続けた。

マコが降りる駅に着いて、マコは座席から立ち上がった。

「じゃ、またね」

その言葉はマコの口から飛び出した。マコは跳ねるように車両から出る。私は追いかけるように席を立てて扉の前に行った。

「やっぱりマコはすごいや」

マコの日焼けした頬が持ち上がる。

「何それ！」

夕日を反射してきらきらと輝く目が、きゅつと細くなつた。マコは手を元氣よく振つた。閉まりかけた扉の隙間に、

「またね！」

とねじ込む。動き出す車両の中で、私も精一杯振り返した。マコの短い癖つ毛が、春風に煽られて勢い良く舞い上がる。それでも、手を振るマコの身体は揺らがなかつた。

その知らせが届いたのは、突然のことだつた。

健康に気を使い、食事バランス、運動量の管理に余念がなかつた彼女は、ジョギング中に交通事故で死んだ。

入学式用を買つていたスーツを卸して葬儀場に向かうと、まつさらな黒に包まれた若者が溢れていた。まだ一か月も経つていないのに、再び勢揃いだ。またねなんて、簡単に言うもんじゃやない。

目を赤く腫らした千花ちゃんに引き留められた。依田はもう県内にいないという。白いハンカチを握りしめた手がわずかだが震えている。それに自分の手を添えた。徐々に、じんわりと温まつた。

若い命を惜しむ人達は、皆一様に震えている。昔祖父の葬式に出たときは、大往生に笑みをこぼす人もいたというのに。

読経が終わり振り向いた僧侶は、存外若い人だつた。法話の最中、私は彼の先に前途を絶たれたマコを見ていた。

別れ花の時になって初めて、私は棺に近づいた。
棺の中を覗き込むと、交通事故だつてのに綺麗な顔だつた。健康的な小麦色の頬に触れた。かたくて冷たい頬に触れた。マコの頬に、初めて触れた。

あとがき
今回の話のテーマは『春』と『塞翁が馬』です。春は出会いと別れの季節ですね。とても春らしいお話になつたと思います。『塞翁が馬』という言葉が個人的に結構好きなので、その雰囲気も感じ取っていただけたら嬉しいです。

桜の絵

風影露

私が春川桜花さんに会ったのは桜の花が咲き乱れるうらかな日のことだった。その日、私は友人に依頼された絵を描くために山の桜林に来ていた。山頂への道から少し外れたそこは、まるで小説の中の風景のように幻想的にもかかわらず、ほとんど人が訪れない場所だ。

私は絵を描くのに丁度良さそうな場所を見つけると、椅子を広げイーゼルを配置した。誰かの為に絵を描くのは久しぶりのことだ。何の便りもなく突然訪ねてきた友人は私に大切な人に贈るための絵を描いてほしいと依頼された。私で良いのかとも思ったが、友人がせつかく頼んでくれていたのだからと引き受けることにした。友人にどのような絵が良いのかと尋ねると、桜の絵が良いと即座に答える。なんでも、贈る相手の好きな花が桜だそうだった。私が、桜はあまり描かないと答えると、友人はにやりと笑って言う「それも綺麗な桜ではないんだ、妖しい桜。そういうの得意だろうか？」確かにそうだった。少し妖しい異界めいた題材は私の得意とするものだった。私はそれならば丁度良い場所に心当たりがあると答えた。

それからしばらく夢中で描いていると、急に手元に影が差す。雲でもかかったのだろうかと思っていると、手元を覗き込むようにして女の子が立っている。

「ごめんなさい、あんまり素敵なものだからつい」

私と目が合うと女の子はそう言った。私は何か言おうとしたが、その人の姿を見て言葉が失う。満開の桜の下で微笑む彼女はまるで彼女自身も桜の花の一部のように風景に自然に溶け込んでいた。

「どうかしましたか？」

「いえ、別に」

私がいまだ長い時間黙って見つめるものだから女の子は不思議そうに尋ねた。私は平静を装ってそう答えたが、よくよく考えれば別に

という答えはおかしかったかもしれない。

「お花見ですか？」
まだ立ち去る気配がない女の子に取り繕うように話しかけた。女の子は少し驚いたように目を見開いてから、ゆつくりと笑みを浮かべた。

「はい、散歩がてら少し足をのばしまして。ここの桜きれいですよね」

「そうですね、とても見事だと思います」

そう言うのと、その人は嬉しそうに笑った。ぬるい風に桜がひらひらと漂っていた。

それから晴れている日は毎日、桜林に行つて絵を描いていた。別れ際に春川桜花と名乗った女性は夕暮れ近くになると現れて私の絵を覗き込んだ後、私と少し話をするのが習慣になっていた。初めは戸惑っていたが、何日か同じことが繰り返されるうちに私も桜が好きだな不思議な人との会話が楽しみになってきていた。ある時、何故声を掛けようと思ったのか尋ねると、桜花さんは「この桜林で私以外の人を見かけたのは久しぶりだったから嬉しくなってしまう」と、言っていた。それはそうかもしれない。桜が咲いていない時期の桜林に訪れる人はあまりいないだろうから。

「桜は好きですか？」

そんな質問をされたのは絵がほとんど完成に近づいた日のことだった。私は筆を置いて桜花さんの方を振り返った。どのような意図の質問か分からなかった。

「どちらかというとあまり好きではありません」

首を傾げつつも率直に答えた。絵や小説、などそういった春を表す概念としての桜が嫌いなわけではない。桜に風流を感じる心も持ち合わせた。私がいまだ、花として桜が好きかと言われればそれは否か。私が誰の目も通さず感じる桜はいつだって妖しくどこか禍々しいものだった。

「やっぱり」

桜が好きなのは桜花さんは何故か声を弾ませて言った。私は内心首を傾げたが何も言わなかった。

「明日も、ここに来ますか？」

「そうですね。この絵も明日中には完成しそうです」

明日この絵が完成したら桜花さんと会う機会がなくなるかと思うと少しだけ寂しい気がした。

「完成したんですね」

いつもと同じ夕暮れ時、私が声には振り返ると桜花さんがいつもと同じように立っていた。

「素敵な絵です」

「ありがとうございます」

桜花さんは私の横の桜の根の上に腰を下ろした。

「この絵が完成してしまったらまた私、話し相手がいなくなってしまうですね」

「また、来ますよ。私もこの風景は好きなんです」

静かに目を伏せる桜花さんに私は笑いかけた。絵を描き始めたときにはまぶしいほどに咲いていた一面の桜は花びらを風に舞わせて、地面を薄紅色に染め上げていた。

「どうしてここに人が来ないか知っていますか？」

桜花さんの問いに私は答えた。夕日に照らされてあたり一面は真っ赤に染まっていた。

「人を狂わせるからでしょう。この桜が」

桜は好きではない。何となく禍々しい感じがするから。薄気味悪い不吉な感じがするから。視界一面に桜が広がっているこのような場所には特に。

けれど、その一方で非現実的なまるで異界に迷い込んだかのような気持ちにさせられるこの風景に魅力を感じていた。

「まるで、他人事ですね」

「そのように見えますか？」

残念そうに呟く桜花さんに私がそう答えると、桜花さんは口元に手を当てて笑った。

「本当は初めから気が付いていたのですね。だってそうでなかったらそのような絵描けませんもの」

桜花さんは私の手元にある絵をちらりと見て言う。そこには目の前にある桜並木が描かれていた。友人の依頼通り妖しい本来は咲いていないはずの桜の木が。友人が私の元を訪れたのは池も凍る冬の日のことだった。私は桜がまだ咲いていないことは分かっていたけれど、絵の参考にするためにこの桜林まで来た。そこで私が見たのは咲いているはずのない桜といえるはずのない女の人だった。

「私を連れていきますか？」

私が冗談めかして尋ねると、桜花さんは笑みを深めた。

「まるで、連れて行ってほしいみたいです」

その問いに私はまさか、と答え手元の絵を見た。

「ただ、少し興味はあります。どこへ連れていかれるのか、どうなるのか」

自分の表現したかったものが見られるかと思うとそれもよいかと思ってしまうのだ。桜花さんは少し考え込むと妖しい気配を消しているも通りの表情で微笑んだ。

「それならば、今は連れていきませんね。それじゃつまらないですもの」

桜花さんはそう言うって立ち上がると、私の方をちらりと見た。

「私、あなたの描く桜の絵好きですよ。だから、また絵を描きに来てください。そうしたらいつか気が向いたら連れて行ってあげるかもしれない」

桜花さんはにこりと少し悪戯っぽく笑った。

「分かりました。次にここへ来るときは桜花さんの為に桜の絵を描きます」

桜花さんは何も答えずにただにっこりと笑うと、まるで桜の花が

風にさらわれるように消えてしまった。一面の桜も風が通るたび少しずつ消えていった。

もう、季節外れの不思議な桜を見ることはないかもしれない。次は桜が咲いている季節に訪れよう。大切な人に贈るための絵を描くために。

あとがき

お読みいただきありがとうございます。今回のテーマは桜です。妖しく幻想的な感じが表現できていれば良いのですが。桜林の葉の緑色が入ってこない一面の薄紅色と幹と地面の茶色が何となくいつも見えていて不思議な気がします。

揺波は《苛鳴》上空十キロメートルを浮遊する硫黄雲の上を、鼻歌を歌いながら飛翔していた。旋律は覚えていないが曲名は覚えていない、一億年ほど前に流行ったような気がする電波歌だ。旋律にしたって、揺波が覚えているのは直交周波数分割多重方式によるマルチキャリア歌の、高速フーリエ変換で区別されるサブキャリア歌のひとつに過ぎなかった。

外気温は三百八十九ケルビン。地表よりは随分と涼しい。淡黄色の硫黄雲の間からは、扁平な大地を溶岩がだらだらと流れている光景や、黄色い硫黄の海洋がゆらゆらと波打っている光景や、種々の硫黄同素体が絡まり合った奇怪な氷山が浮遊する光景が垣間見える。この惑星は火山活動が非常に活発で、火山から放出される二酸化炭素と二酸化硫黄、硫化水素がこの惑星の大气を形作り、硫黄がこの惑星の海洋を形作っている。

揺波が鼻歌を歌っているのは、播種に進展があつたからだ。小型探査機が採集したサンプルを簡易分析したところ、極域の硫黄海洋に散種した自己複製体のひとつが、増殖と進化を開始していることが判明したのだ。惑星系の形成から二十億年、《苛鳴》における最初の成果だった。

千隻の惑星上航空船で構成される揺波は、一万年かけて採集した大量のサンプルとデータを抱え、意気揚々と大気圏を離脱した。《苛鳴》周回軌道上の研究ステーションにそれらの一部を保管し、ドックヤードで千隻の惑星上航空船から千機の惑星間航宙船に乗り換える。核融合推進装置を噴射して《苛鳴》周回軌道を離脱し、《彷徨》周回軌道に入った。

《彷徨》は恒星《燦洋》の第二惑星だ。表面全域が深さ百キロメートルの酸化水素の海洋に覆われているのが特徴である。酸化水素は青いが、《彷徨》は常に青いわけではない。酸化水素は惑星の表面温度

の変化に対して正のフィードバックをするので、《彷徨》の海洋表面は数千万年というスパンで凍ったり融けたりする。つまり《彷徨》には白い時と青い時があるのだ。

今の《彷徨》は白色、つまり海洋の表面は凍結していた。

望み薄と思いつつも、揺波は《彷徨》周回軌道上のドックヤードで千機の惑星上航空船に乗り換え、惑星表面に降下する。適当な地点を選び、それぞれ真っ白な氷盤で覆われた地表に着陸した。上空は晴れ渡っていて、《燦洋》が燦々と明滅している。外気温は百七十九ケルビン。

揺波は各船から各種の小型探査機を展開。サンプルとデータの採集を開始した。海に潜るには表面を覆う氷盤を掘削・穿孔しないといけないので、少し時間がかかる。二百年ほどかけて氷盤を突破し、海洋の探査を開始。海洋の探査は方法が確立されてしまえば困難は少ないが、《彷徨》の広く深い海は体積が六百億平方キロメートルもあり、やはり時間がかかる。採集されたサンプルとデータの簡易分析を平行して進めながら、少しずつ探査範囲を広げていく。

氷盤の中で生命が繁殖している可能性もあるので、そちらも探査を進める。しかし氷盤を全て掘り返すわけにもいかず、サンプルとデータの数はどうしても不十分だ。

二万年ほどかけてじっくりと探査したが、以前散種した自己複製体が定着している兆しは見つけられなかった。揺波は氷盤の上で唸る。液質惑星は播種が難しいと聞いていたが、これほどとは。

液体の酸化水素は生物にとって便利な溶媒のひとつであり、酸化水素の海洋を持つ惑星は播種事例も多い。しかし、《彷徨》のような全域が深い海に覆われた液質惑星に播種するのは簡単ではなかった。液質惑星の海底には、巨大な液圧によって固体となった海液が凝っている。このため岩盤が海液によって浸食されず、生命の活動に必要な各種元素が海洋に流出しないのだ。

《彷徨》の場合は海底火山による元素の供給があるが、それでもこの巨大な海の中ではすぐに薄まってしまふ。その上、酸化水素の特性の

ため気候も安定しない。今、自己複製体が定着しても、一千万年後には気温上昇に適応できず、滅んでしまうかもしれない。

水質小天体を落として元素を供給してやった方が良いのかもしれない。しかしそれは精密分析の後だ。とりあえず、次の《澄晶》に向かうとする。

揺波は《彷徨》大気圏を離脱し、ドックヤードに入って船を乗り換え、《澄晶》周回軌道に入る。再び船を乗り換え、《澄晶》大気圏に降下した。

《澄晶》は典型的な珪素質の岩質惑星だ。表面の四分の一ほどが酸化水素の浅い海洋に覆われた、播種が容易な惑星である。創種から十億年が経過しており、二千万年前の探査では酸素光合成を行う複雑な生物が誕生していることが分かっていった。

千機の惑星上航空船で惑星に降下し、《苛鳴》や《彷徨》で行ったのと同じようにサンプルとデータを採取する。《澄晶》は前の二つの惑星より大きい、海洋が深く狭く、環境も平穏なので探査には八十年しかかからなかった。

まだ真核生物は誕生していなかったが、しかし生物は随分と拡散していた。採集した遺伝子から生物の系統を分析する。最初に散種した十二種類百二十系統の自己複製体のうち、二種類七系統が生き残っていた。《澄晶》の表面には六個の海洋があり、それぞれを一系統が占有している。残る一系統はより小さな湖沼に生息していた。

揺波は満足して《澄晶》大気圏を離脱する。

この後、揺波は《燦洋》を周回する《麗影》、《騰雲》、《遊凱》、《余昏》、《瑞青》、《残淵》、《貴沌》、《暖景》の八つの惑星と、それらの有望な衛星を探索した。全ての探査には十六万年を要し、事故で合計五万八千機の探査機と八十機の播種船を喪失した。揺波はへとへとになって生活拠点である内郭小天体群に戻った。

内郭小天体群の統合研究ステーションには、各惑星の研究ステーションからサンプルとデータが送られていた。それらの概要を並べて眺め、にまにまと笑う。《彷徨》と《暖景》に進展が無いのは残念

だが、総合的には順調に前進している。特に《苛鳴》に自己複製体が定着したのと、《騰雲》で想像より遙かに早く多細胞生物が出現したのが嬉しかった。

精密分析は後に回し、揺波は休眠ステーションに入渠する。播種者は人核中枢の同期や、記憶の整理および修復、精神的負荷の回復のために、定期的に休眠ステーションの演算装置に人核中枢を移動させ、休眠する必要があるのだった。普通は十万年ごとに一万年の休眠をするもののだが、探査に夢中になりがちな揺波はこの周期をよく無視する。

「じゃあ離扇、後は頼んだ」

揺波はハウスキーパーとして使役している知能・離扇に権限の一部を引く次ぐと、休眠ステーションで眠りについた。

記憶は永遠ではない。播種船に搭載されるアモルファスストレージは非常に安定だが、億年という時間が経過すれば機械的・化学的に摩耗していくし、書き込みと読み出しを繰り返せば寿命はより短くなる。播種者の寿命が理論上は存在しない一方で、彼らの記憶は数十億年程度しか保たない。

揺波が思い出せる最古の記憶は、三十億年前の《大融合》の光景だ。それは質量二×十の三十九乗トンの銀河《銀河》と、質量四×十の三十九乗トンの銀河《輝仙》の衝突であった。二つの銀色の円盤が互いの巨大な重力井戸に落ち込んでいき、交錯を繰り返しながら融け合っていく。兆の星々を互いに注ぎ合い、あるいは虚空へと弾き飛ばしていく。

揺波を含めた人類はそれを、二つの銀河から二十万年離れたところから見ていた。《銀河》は人類の発祥の銀河であり、三十億年前まではほとんどの人類がそこで暮らしていた。しかし《銀河》が《輝仙》と衝突する直前に、彼らは《銀河》を脱出したのだ。

間近で観測する銀河の合体は、あまりにも壮大な光景であった。

衝突した二つの銀河では、星間ガスの密度に揺らぎが生じ、星形成がにわかに活気づいた。明るい星がたくさん生まれ、二つの銀河は一時的に明るくなりさえした。しかしそれは終わりの始まりでしかなかった。

このような爆発的星形成で誕生する大質量星は、寿命が数百万年から数千万年と非常に短い。それらは揺波たちが観測している間に次々と寿命を終えて、超新星爆発を起こしていった。そして星が短期間のうちに誕生し終焉するということは、星形成に適した星間ガスが短期間のうちに消費されていくことを意味する。

つまり銀河が一気に老いるのだ。

十億年におよぶ《大航虚》を終えた二十兆の人類は、《銀河》から一千万光年離れた若い銀河《泰流》に移り住んだ。揺波は原始星のひとつに居を定め、後にこれを《燦洋》と命名した。幸運なことに《燦洋》には十一個もの惑星ができたので、せっせと播種を始めた。

《銀河》と《輝仙》の合体により誕生した楕円銀河は《融郷》と名付けられた。揺波は《大航虚》から二十億年が経った今でも、時折、望遠鏡を使ってかつての故郷を観測する。

合体に伴う爆発的星形成で星間ガスを使い果たした《融郷》は、すっかり老いた銀河となっていた。明るい星は死に絶えて超新星爆発は起こらず、暗い星も少しずつひっそりと寿命を終えている。この銀河の寿命もあと三十億年ほどだろう。

《融郷》だけではない。宇宙全体で老いが始まっていた。星形成率と超新星数は下がり、銀河はどんどん暗くなっていく。時間の経過と共に恒星の金属量は増加し、それに伴い惑星の数も増えるが、それでもあと数百億年もすれば恒星そのものが形成されなくなる。いずれ播種者としての仕事を続けられなくなるであろうことを、揺波も知っていた。

「おはようございます。現在の《泰流》慣性参照時刻は二十億二千四

百五十三万四千九百年です」

離扇の挨拶で、揺波は自分の意識が覚醒していることに気付く。休眠中の自己復元と離扇による点検・整備・補給により、ソフトウェアもハードウェアも万全の状態だ。しかし一万年ぶりに動作させたため、まだまだ末端が覚醒しきっていない。もう三百六十年休眠していたところだが、それをすれば三百六十年が七百二十年になり、千八十年になることは目に見えている。

揺波は運用中の千基の内核中枢筐体を筐体保管庫から千隻の惑星間航宙船に載せ替えると、のろのろと休眠ステーションから這い出した。

しばらく系内を飛び回ると、頭がすっきりとしてくる。

まずは系内の各種機器で構成される星系内ネットワークに接続し、系内の現在の状態を確認する。揺波が休眠している間、大規模な天体衝突や彩層爆発といった破滅的なイベントは起こっていないようだ。一万年の間に三千三百八十五万四千二百十六個の揮発性小天体が《澄晶》軌道以内に侵入し、そのうち六千五百七十二個が明るい髪と尾を引いていた。各所に配置された観測ステーションのデータをざっと見聞するが、目立った事象は無い。《騰雲》大気中の長期性高気圧は二つから一つに減っていた。

次に恒星星間通信ステーションに接続し、レーザー通信で一万年の間に受信したメッセージを受け取る。恒星星間通信ステーションは強力なレーザー発振器と巨大な望遠鏡を備えており、これらを四十光年離れた恒星《了信》に向けている。《了信》星系には星系間ネットワークの中継ノードがあり、これを介して《燦洋》にメッセージが届けられるのだ。

この一万年の間に恒星星間通信ステーションが受信していたのは、人類互恵体からの公共メッセージに《早識》報道事業体からの報道メッセージ、友人からの個人メッセージ。緊急メッセージは見当たらない。

人類互恵体からの公共メッセージを開封し、災害情報欄に目を通

す。《燦洋》に超新星警報が発令されていないことを確認。《燦洋》の半径五〇光年以内で大質量巨星や白色矮星―恒星接触連星が存在しないことは確認済みだ。しかし、ガンマ線バーストが遠方から飛来しないとも限らない。《燦洋》にいる揺波が全滅しても腕域保管ステーションに保管されたバックアップが起動するだけだが、せっかく育成した惑星と生命が全滅するのは惜しい。

《早識》報道事業体の報道メッセージは開封せず、情報保管ステーションに送信。どうせ下らない政治ニュースと経済ニュースが扇情的に書き連ねられているだけである。

《思種》情報事業体の報道メッセージの方は腰を据えて読む。《思種》は播種についての情報を専門に扱う事業体のひとつだ。直近の播種事例についての報告や播種学者が執筆した論文、その他お役立ち情報が満載であり、揺波の友人知人の間でも評判が良い。揺波自身もここに播種情報を掲載したことがある。

「ふむふむ、惑星《回漕》で金属基盤種の定着を確認。複製周期は二万年。低温岩質惑星ならそんなものか。進化の速度が遅いのが気になるな。環境の変動に適応できないんじゃないか？」

「《寸葉》星系で珪素基盤種の惑星間拡散を確認。たった二十億年で惑星間種まで育種するのはすごいなあ。俺も創ってみたいけど、軌道間隔の広いG型星じゃ無理かなあ」

「お、液質惑星についての論文だ。直径一万三千キロメートル、海深百キロメートルの酸化水素液質惑星での創種に必要な氷質小天体の質量は、えーと、金属量が二パーセントで、えーと四千億トンぐらいか。面倒くさいなあ」

揺波がメッセージを読みながらぶつぶつ言っていると、離扇が揺波の船に通信レーザーを当ててきた。

「予定表には『買い出し』とありますが」

怒られた。

離扇はかつて揺波が使っていた惑星間航宙船に市販の知能を乗せて造ったハウスキーパーだ。揺波だけでは手の回らない小天体の管

理や、各種機材の点検・整備・補給といった雑用をしてくれる。播種に夢中で生活を疎かにしがちな揺波に注意喚起をするのも、その仕事のひとつだった。

「あー。そうだった」

揺波は後ろ髪を引かれつつも《思種》を読むのを止め、友人からの個人メッセージにさらりと目を通し（こちらもたいしたことは書いていなかった）、外郭小天体群を周回するドックヤードに向かう。

揺波は惑星間航宙船や惑星上航空船といった播種船を、離扇のものも含めて百種十一万隻保有しており、それらは星系各所のドックヤードに分散して保管されている。惑星に降りたり、系外に出かけたといった必要に応じて、それらの船を乗り換えるのだ。

外郭小天体群のそのドックヤードには、買い物用の恒星間航宙船が予備を含めて千百隻停泊していた。揺波はそのうちの千隻に人核中枢筐体を載せ替える。

各船にコンテナを装備させ、準備を整えると、揺波は系外に向けて発進した。各船の船尾に搭載された核融合推進装置が点火し、ゆっくと加速していく。

「じゃあ、惑星たちをよろしく」

離扇に電波で呼びかけて星系を後にする。《燦洋》から離れるにつれて、少しずつ惑星間媒質の密度が低下していき、薄い恒星間媒質だけが残る。播種船は星間媒質からも推進燃料と構造物質を取り込んでるので、少し息苦しい気持ちになる。百年ほど飛行を続けると、《燦洋》は他の星と変わりない小さな点になった。重力も随分と弱まり、やや心細い。〇・〇―光速まで加速したところで、核融合推進装置の噴射を停止する。

《転粒》腕は《泰流》の中心から四万光年の場所にある小さな渦状腕のひとつだ。《燦洋》が位置するのはその中でも恒星の密度が低い田舎である。大規模商業星群からは遠いので、揺波は《燦洋》の付近を通過している商店星系で買い物をする。通信販売の方が便利なのだ。たまには外出した方が良く、離扇に言われ、近所で入手できるも

のは近所で入手するようにしていた。

周囲にぼつぼつと星明かりが見える。赤いものが多く、青いものは少ない。黄色いものは中間ぐらいだ。星明かりより小さいが温度の高い光は、他の播種船の炎影だろう。

五千年ほど飛翔を続けると、目標の星系が間近に見えてきた。《繁円》星系はG型星とF型星とM型星による三重連星で、それぞれの部分星系に元素屋と船屋と機材屋が入っている。

今回の目当ては元素屋だった。星系に住んでいれば大抵の元素が採集できるが、量が少ないものもある。それに利用しやすい状態で存在するとも限らない。《燦洋》の核合成炉と化学工場を使えば製造できるものがほとんどだが、店で買った方が安いし質が良い物質も少なくない。

元素屋星系の第五惑星の周回軌道に進入し、店主に注文を送信する。準備には三千年ほどかかるということで、休憩スペースの設けられた第三惑星の周回軌道に入る。

冷たく乾いた第三惑星は店主による播種が行われており、表面には纖維様の珪素基盤種が蔓延っていた。播種から二十億年でここまでに生態系が発達しているのは、ある程度進化した既存の種を導入しているためだ。揺波のように生物以前の自己複製体から創種するのは、やりがいはあるが時間と手間がかかる。

販売ステーションで購入した燃料を飲みながら第三惑星を眺めていると、横から通信レーザーを当てられた。

「揺波さん、お久しぶりです」

「平炎じゃないか」

第三惑星の周回軌道に、平炎を構成する八百機の播種船が進入してくる。平炎は揺波の友人・直炎の子だ。直炎の恒星は四億年前まで《燦洋》と同じ散開星団に所属していたので、その頃はよく話したり遊んだりした。まだ六億歳の、若い播種者である。

とはいえ彼は播種者であつて播種家ではない。今の彼は《合英》科学研究体という研究機関で人類学の研究をしていた。研究のために

銀河中を飛び回っているらしく、滅多に見かけない。

「サンプル採集のためにここに来ました」

「じゃあ研究の一環か。順調か？」

「概ねはそうです。まあ究極的な疑問の解明にはほど遠いですが」

「究極的な疑問？」

「人類がどこで生まれたのか、どうやって生まれたのか、そういう人類学の究極的な疑問のことですね」

「すごいことを研究しているな。私は自分の星系を世話するだけで

手一杯だ……あ、燃料奢るよ。えーと、八百隻だったな」

揺波が販売ステーションに暗号貨幣で支払うと、播種船八百隻分の燃料タンクが放出された。平炎は嬉しそうにスラスタを吹かし、

燃料タンクをアームで捕獲して燃料補給を始める。こういう所作は

とても若者らしい。

「ありがとうございます。でも確か揺波さんは十一個の惑星全部に播種をしているんでしょう？ 人類播種統括体からも喜ばれている

のでは？」

「まあ、表彰されたりはしたけど……」

揺波は播種者であり播種家だ。生命の播種は研究や探査、芸術や競

技と同じように人類普遍の価値を持ち、播種家は人類播種統括体か

ら資金を供与される。またサンプルやデータを研究機関に提供すれ

ば資金は上乘せされる。十一個もの惑星に播種を試みている揺波は、

それなりに人類に貢献していると言えた。

しかし揺波自身は人類に貢献したいとは少しも考えていない。そ

うしたいからしているだけだ。自分自身では播種がそんなに人類に

貢献しているとは思っていないので、賞賛されるとつい身じろぎし

てしまう。

揺波は話題を切り替えることにした。

「平炎はどんな研究をしているんだ？」

「昔話と古語と慣用表現から、原始人類がどんな生態で、どんな環境

で生きていたのかを推測する、という研究をしています」

「原始人類？」

揺波が語尾を上げると、平炎は嬉しそうに言った。

「ええ。揺波さんは、人類がどうやって誕生したと思います？」

「うーん……。宇宙のどこかで化学反応系が自己複製サイクルに乗り、それが複雑化して生物になり、長い時間をかけて進化して知能を獲得した、とか？」

生命が自然発生した事例はこれまで確認されていないが、いつかどこかで起こらなければ、人類は存在し得ない。

「確かに、それが今までの定説でした。でも、詳しく調べてみると現生人類に共通する自己複製プロセスが自然発生あるいは自然進化する可能性は極めて低いんですね。宇宙の広さが実際の一億倍あったとしても、まだまだ低い」

自然に発生したのでなければ、可能性は一つしかない。

「じゃあ、私たちは何者かに創種されたということか？」

「その可能性の方が高い、と僕たちは考えています。もっと発生確率の高い自己複製プロセスから誕生した生物が、知能を獲得し、人為的プロセスによって現生人類を創り出した。あるいは原始人類が自身を改造して現生人類になったのかもしれないが、その区別にそれほどの意味は無いでしょう」

「それで、君たちはその原始人類がどんな奴らだったのかを研究している」と

「はい。原始人類が僕たちと全く違う生物であることは分かったのですが、じゃあ彼らがどんな形態をしていてどんな環境に生きていたのか、ということを知りたい。でも七十億年前にいた現生人類の共通祖先ですら記録が残っていないので、原始人類の記録も当然残っていない。だから、古語や昔話から頑張って推測しようというのが、僕たちの研究です」

「言葉や物語からそんなことが分かるの？」

「想像するぐらいはできます。例えば古語だと、波長七百六十ナノメートル程度の電磁波を『下赤』、波長三百八十ナノメートル程度の電

磁波を『上紫』を言いますよね。そしてこの二つの中間の波長の電磁波にはだいたい五十ナノメートルごとに由来不明の名前が割り振られている。一方で波長が『下赤』より長い電磁波と『上紫』より短い電磁波の名前はもっと記号的であることが分かっています。これが何を意味するのか、分かりますよね」

「つまり原始人類の可視光の範囲は、波長七百六十ナノメートル以下三百八十ナノメートル以上ということか」

「その通り。可視光の波長がそれということは、彼らの住む天体に降り注いでいる電磁波の波長がそれぐらいなことになる。恒星のスペクトル型で言えばG2型ですね」

「彼らの惑星はG型星を主星としていた」と

「電磁波の名前だけでは確実なことは言えませんが、他の証拠と合わせればそれなりに確度の高い結論だと思えます。他には、例えば私たちは知能のことを慣用的に『頭』と表現しますよね。頭といえば動物において主に身体の前方に存在する感覚器官や捕食器官が集中した場所のことです。つまり原始人類の思考器官は頭に存在していた可能性がある」

「へえ」

揺波は平炎の話に感嘆する。同時に、平炎からの赤外線放射が増大していることに気付いていた。特に各船の、人核中枢筐体が格納された位置からの放射が激しい。自分の研究の内容を他人に話すことができ、興奮しているようだ。

「昔話というのは、例えば海洋の登場する頻度と扱われ方から、原始人類が大きな海洋を持つ惑星に生息していたと推測できます。酸化水素の海洋である確率が高いので恐らくはそれですね。古語には酸化水素を意味する『水』という簡潔な呼称がありますし、G2型主系列星の酸化水素の液相存在可能軌道領域の公転周期は、私たちが習慣的に使用する時間単位『年』と一致するんですよ」

「液体の酸化水素を溶媒とするなら、炭素基盤生物が有力か」

「それについては今、各種の自己複製プロセスの自然発生確率を計

算しているところなので、その結果を待つているところですよ」

「なるほど。その古語や昔話を収集するために銀河中を飛び回っていたわけだな」

「そうです。楽しかったですけど、疲れましたね。これを終えたらしばらく親の育種の手伝いでもしながら休もうと思います」

そこで、第六惑星の店主から通信が入った。注文した物質が準備できたらしい。揺波は第六惑星に行ってコンテナ一杯に荷物を受け取ると、平炎に電波で言った。

「面白い話をありがとう。楽しかったよ」

「いえ、こちらこそ。今度、《燦洋》にお伺いしてもよろしいでしょうか？ 僕も播種の話をお聞きしたいです」

「もちろんだとも。遊びに来てくれ」

揺波は核融合プラズマ噴射炎をチカチカと明滅させ、原始的な光信号で平炎に別れの挨拶をしながら、《繁円》星系から離脱する。買物の他に思わぬ収穫があり、良い外出だった。

これまた鼻歌を歌いながら《燦洋》星系の外殻小天体雲に降り着くと、呼んでも無いのに離扇がすっ飛んできた。彼は揺波から十キロメートル離れた位置に停止すると、言った。

「《澄晶》で大規模な火山噴火が発生しました」

離扇が提示したデータを見て、揺波はうめく。

スーパーホットブルームだ。一個の火山から溶岩が噴出するのでなく、一帯の地面から溶岩が噴出し、大量の温室効果ガスが惑星を覆い尽くす。これほど大規模な火山噴火が起こってしまえば、《澄晶》に満ちつつあった生命は全滅してしまうだろう。

「マジか。この間ニュートリノ撮像装置で調べたときは何も無かったんだけどな……」

播種というのはこういうものである。

播種者は人類を構成する四百万以上の種族の一つだ。その名の通

り、天体に生命を播種する習性を持つ。とはいえ七十億年という時間の経過によってその性質は変化しつつあり、今では実際に播種を行う個体は播種者全体の十パーセント程度となっている。播種だけを生業としている個体の割合はもつと低い。

揺波と儂灯は惑星《回漕》にゆっくりと降下した。惑星の自転により明滅する赤い恒星光の下、二人は数キロメートルの高度を維持しながら地表を観測する。

珪素質の《回漕》の地表には、鈍い金属光沢を放つ奇怪な物体が林立していた。この惑星で育種された金属基盤種《穿樹》である。増殖周期は種類によっても異なるが、数千年から数十万年。惑星に生息する生物としては極めて長い。とはいえ播種者の時間感覚からすればそれほどではなく、新しい個体が大地からよきによきと生えてくるのが観測できる。

《穿樹》は金属鉱床に生育します。恒星光のエネルギーを使って鉱床の金属を還元し、自分の構成材料にするのです。十分に成長すると種子を飛ばし、運良く他の鉱床にたどり着いたものが新しく芽吹きます」

歪鎖が周回軌道から二人に語りかける。彼は《回漕》が属する《浴勢》星系の主だ。当然、《回漕》に《穿樹》の元となった金属基盤自己複製体を散種したのも彼だった。

「あれは？」

儂灯がレーザーで指示したのは、隣り合った二つの《穿樹》だ。茶色い《穿樹》が身体をゆっくりと突出させ、銀色の《穿樹》がそれから逃げるように身体を傾かせている。最終的に銀色の方が逃げ切れず、茶色い方の突出部が身体に触れる。それでも銀色の方は逃げようとするが、茶色い方の突出部にぐるりと巻き付かれてしまった。

「あれは嫌がらせです。茶色い方が銅を主体とする《穿樹》、銀色の方が鉄を主体とする《穿樹》です。銅は鉄よりイオン化傾向が小さいので、両者が接触すると鉄の腐食が進行し、銅の腐食が抑制されるのですな」

「それはすごい。銅は鉄より希少だから増殖に制限がかかるけど、イオン化傾向が小さいことを利用した戦略が可能になるというわけか」
儂灯は光学カメラを爛々と輝かせる。

二人が見ているうちに、鉄の《穿樹》がみるみると朽ち落ち、その上に銅の《穿樹》が覆い被さっていく。これで銅の《穿樹》が浴びることのできる恒星光が増大した。それに、この場所に鉄の《穿樹》の種が落ちて芽吹くことはできなくなった。

闘争に勝利した銅の《穿樹》はしばらく成長を続け、数百年ごとに分枝の先端から電磁氣的な力で種子を発射する。やがてその身体は老化のため電解液の雨を浴びる毎に変色するようになり、最後には生命活動を終えて酸化銅と硫化銅、硫酸銅の塊が残る。これが新しい《穿樹》が芽吹くための鉱床となるのだ。

この惑星の全土でこうした陣取りゲームが行われており、結果として鉱床が複雑な斑状に分布しているという。

揺波は前から気になっていた質問を歪鎖にぶつける。

「増殖周期が数万年ということは進化の速度も相応に遅いと思うのですが、環境の変動には耐えられるのでしょうか？」

歪鎖が周回軌道から答える。

「確かに《穿樹》は進化の速度が遅い。しかし金属で構成された身体は非常に強靱です。X線彩層爆発にだって耐えられます。低温環境には弱いですが、もともと《回漕》は環境が安定した惑星なので、問題ありませんでした」

「なるほど。しかし私のようなせつかちにとっては進化の速度が遅いとどうにももどかしくて……」

揺波の言葉に、歪鎖は笑った。

「確かに、私も随分とのんびりした進化だと感じます。もどかしく思ったこともありますね。しかし《沿勢》の寿命はあと一兆年あります。それだけ長い時間があれば、興味深い進化をたくさん見せてくれることでしょうか……。おや、お二人ともあちらを見てください。あれは面白いですよ」

歪鎖が指定した座標では、先ほどと同じように銅の《穿樹》が鉄の《穿樹》を襲っていた。銅の《穿樹》の身体の一部が突出し、鉄の《穿樹》の身体に触れる。鉄の《穿樹》が一瞬沈み込むような挙動を見せた。そのまま朽ち果てるかと思いきや、鉄の《穿樹》は耐え、それどころかますます大きく成長する。

一方で銅の《穿樹》はみるみる朽ちていった。まずいと感じたのか鉄の《穿樹》から離れようとするが、鉄の《穿樹》がすばやく動いて退路を塞ぐ。そのまま銅の《穿樹》は朽ち果ててしまった。

「……」

二人はその攻防を呆然と見ていた。

「あれは鉄の《穿樹》ではなく銀の《穿樹》です。あの種類は表面に鉄を被って鉄の《穿樹》に擬態しているのですね。鉄の《穿樹》だと思っただけの《穿樹》が近付いたところを、捕縛して腐食させます」
儂灯は訪ねた。

「彼らはどうやって他の《穿樹》の組成を推定しているのですか」

「それはまだ詳しくは分かっています。大気中を浮遊する電解液に含まれる金属イオンの種類と濃度から推定しているという説が私の中では有力ですが」

そうして十万年ほど見学した後、揺波と儂灯は《回漕》の地表から引き上げた。周回軌道では歪鎖を構成する千二百隻の播種船が待ち構えていた。

「いかがでしたか」

歪鎖の質問に、揺波は答える。

「正直、低温環境の金属基盤種ということでもっと退屈なものを感じていました。でも実物は金属の性質を活用したとても動的な活動をしますね。面白かったです」

儂灯は質問をする。

「金属基盤種の創種は難しかったですか？」

「難しい、とは感じませんでした。ただ、増殖周期が長いので、定着したことが分かるほど増殖するまで待たなければならぬが大変

でしたね」

「ありがとうございます」

「儂灯は礼を言う。彼は十億歳の若い播種者で、播種家として惑星への播種を始めるにあたり、いろいろな惑星を見学しているのだった。」

「さて、揺波さんの惑星たちを見せて貰いましょうか」

歪鎖が言う。

「いやあ、こんなに面白いものを見せて貰った後では喜んで貰えるかどうか……」

「何を言います。一度に十個以上の惑星に播種をしている播種者は銀河全体でも数十人ほどですぞ。しかもそれら全てで創種を成功させているのは揺波さんだけだ」

「数が多いだけという批判もありますがね……」

話しながら三人は、《沿勢》星系から《燦洋》星系に移動する。

播種家には、互いが播種した惑星と生命を見せ合う、という習慣があった。ノウハウを共有するためでもあるし、単に楽しいからでもある。今回の見学会は、前々から気になっていた《沿勢》星系が公転運動により《燦洋》星系のすぐ近くに来到ることに気付いた揺波が申し出たものだ。歪鎖は快諾してくれ、ついでに彼にも見せてやって欲しいと儂灯を紹介された。

揺波は《燦洋》星系に入ると、二人に惑星を紹介していく。

「第十一惑星《暖景》。水質惑星です。水素大気中にメタンを溶媒とした炭素基盤生物を育種しています。恒星光はほとんど届かないので、アンモニアやメタンを使った化学合成がエネルギー源です。極低温環境では反応速度は極めて遅いので、まだマイクロメートル以上のサイズには巨大化していません」

「第十惑星《貴沌》。惑星というより大型の外郭小天体と言った方が正しいかもしれない。ここには生物を構成できる材料があまり無かったので、リンを導入した上で、窒素を副基盤元素としたリン基盤種を創種しています。ここには化学合成に適した物質もあまり無いの

で、わずかな恒星光で光合成をしているようです」

「第九惑星《残淵》。《暖景》と同じ水質天体ですね。同じような炭素基盤の化学合成種を育種しています」

「第八惑星《瑞青》。《暖景》、《残淵》と同じ水質天体ですが、恒星との距離が近いため大気の上層に光合成種が浮遊しています。生息する高度によって溶媒として利用する物質が異なるのが特色です。高度ならメタン、中高度ならアンモニア、低高度なら酸化水素、という感じですね」

「第七惑星《余昏》。岩質惑星ですが、メタンやエタンなどの炭化水素の海洋が存在します。彼らは《眠妙》といって、上空から降ってくるアセチレンをエネルギー源とする炭素基盤種です。元は炭化水素の海洋に浮遊する薄膜のような生物だったのですが、海洋の表面を埋め尽くしてしまったので、一部が上陸しました。最初は傘型の身体を林立させてただアセチレンの塵とメタンの雨を待ち構えるだけだったのですが、現在は雨雲に合わせて移動したり、他種を捕食したりする種も登場しています」

「第六惑星《遊凱》。水素を主体とする気質惑星です。大気より下層の、超臨界水素の層に《閃剣》という金属基盤種が生息していることが分かっています。かなり深い場所なので回収できたサンプルとデータはわずかです。《騰雲》との差別化のために思いつきで金属基盤自己複製体を散種してみたのですが、まさかここまで進化するとは思っていませんでした」

「《遊凱》の水質衛星《試雨》にも播種をしています。《試雨》は地下に酸化水素の海洋を持つ水質天体です。海洋には恒星光が届きませんが、海底には熱水噴出口があるので、これを利用した化学合成種が進化しています。それと、《遊凱》から飛来した放射線が水盤を構成する酸化水素を酸素と水素に分離して、それが海洋に取り込まれるので、酸素濃度は結構高いです。なので大型の甲殻動物と骨格動物が進化しています」

「第五惑星《騰雲》。《遊凱》と同じ気質惑星です。水素大気中を浮遊

し、大気中の電位差からエネルギーを取り出す電位合成種《浮陰》が生態系の基盤となつています。気質天体ではよくあるタイプの生物ですね。《騰雲》は対流が大きいので大型化に成功していて、サイズは数十メートルから数キロメートルといったところですよ」

「第四惑星《麗影》。黒っぽいのは炭素のためですね。炭素質の岩質惑星です。十億年ほど前までは窒素の大気と酸化水素の海洋が存在していたのですが、現在はどちらも宇宙空間に散逸してしまいました。質量が小さすぎたようです。現在は低温・乾燥環境に適應した種だけが細々と生存しています。あそこにいるゴワゴワした四脚の動物なんかそれぞれですね」

「第三惑星《澄晶》。珪素質の岩質惑星です。今は赤道領域に酸化水素の海洋が八個ありますね。何度か火山噴火が起こったり、天体衝突が起こったり、海洋凍結が起こったりして結構手間がかかりました。大型骨格動物の育種までこぎ着けました。そうですね、海洋の周辺にある緑色のものは全部光合成植物ですよ」

「第二惑星《彷徨》。惑星全域が酸化水素の海洋に覆われた液質惑星です。試しに氷質小天体をいくつか落とすとして元素を供給したところ、創種に成功しました。複雑化・大型化も進んでいるのですが、気候が不安定で、数千万年ごとに全球凍結と全球融解による大量絶滅が起こるのが難点ですね」

「第一惑星《苛鳴》。火山から噴出した大量の硫黄が循環している惑星です。《黄焰》という硫黄基盤種が進化しています。あの硫黄の海洋でじたりたたりしているのがそれです。陸上を走っているものや、火山に潜んでいるものもいます。植わっているのは火山ガスを使って化学合成をする種ですね。彼らの特徴は硫黄を含有した火薬を闘争に用いることです。あれを見てください」

揺波が《燦洋》星系への播種を始めてから四十億年が経過し、多くの惑星と衛星で複雑な生物が見られるようになった。確かに、これだけ多様な生物が生息する星系はここだけかもしれない。

やはり歪鎖と儚灯の関心を引いたのが、《苛鳴》の硫黄基盤種《黄

焰》だ。捕食者が被食者に火薬の塊を飛ばして攻撃する様子や、逆に被食者が捕食者に火薬の塊を投げて追い払う様子に、二人は大はしやぎであった。《苛鳴》ほど硫黄が豊富な惑星は少なく、硫黄基盤生物を目にする機会もあまり無いのだ。

「最初は火花を飛ばして威嚇するぐらいだったのが、どんどん過激化していったんです。あ、火薬は求愛にも使います。あのカラフルな奴がそれですよ」

地表では二腕二脚の従属栄養性《黄焰》が、地面に植わった独立栄養性《黄焰》の枝の上で、身体のうちから色とりどりの火花をあげていた。別の固体がそれを見上げている。

《苛鳴》に生息する様々な生物をじっくりと見た後、儚灯が揺波に言った。

「あの、《澄晶》で、気になったことがあるのもう一度見せて貰ってよろしいですか」

「もちろん。何度でも見てください」

揺波は快諾すると、二人を引き連れて《澄晶》周回軌道に戻った。

波は他者との交流が得意ではないが、こうして自分が育種した生物を見てもらうのは楽しい。同じものを愛好している相手なので気が楽でもあった。

三人は周回軌道から惑星を観察する。儚灯は望遠鏡を皿のようにし、何かを探しているよう様子だったが、しばらくすると地表のある地点をレーザーで指示した。

「あれを見てください」

彼が指示したのは砂漠地帯にある大きな岩山で、その麓の崖に茶色い何かがいくつも蟠っているのが見えた。望遠鏡の倍率を上げてみると、それが細長い円柱状が組み合わさった、幾何学的な構造を持つ物体であることが見て取れた。それが十個ほど、断崖に寄りかかるようにして立ち並んでいる。

「あれ、建築物ですよ」

「確かに。あれは住居かな」

「なんだか、幾何学的にすごいきっちりしてますよね」

「言われてみれば。あの円柱は硬質植物の幹体か」

住居を自分で建設する生物の事例は少なくないが、これは揺波が知っているものとは雰囲気が違うような気がした。とても整った構造をしているし、付着物が無く綺麗なのも気になる。

その構造物の正面に開いた穴からは、動物が頻繁に出入りしていた。この惑星に以前から生息していた穴居性飛翔生物の類縁種のようにだ。その穴居性飛翔生物は、群で協力して洞窟の中に梁のようなものを通し、その上で生活することが分かっていた。この住居はその発原型なのだろうか。

しばらく観察していると、住居性飛翔生物たちはぞろぞろと住居から飛び立って行った。三人は望遠鏡でそれを追いかける。住居性飛翔生物たちはあちらこちらの岩山の麓を点々とした後、なぜか軟質植物がまばらに生える平原に腰を落ち着けた。

以前と同じような住居を建設しようとし、失敗する。当然だ。ここには不安定な住居が質量を預ける崖が無い。しかし試行錯誤を繰り返すうちに、少しずつ完成度は上がってきた。

狩猟に出かけたり、採集に出かけたりもしていた。彼らは大型の歩行動物を見つけると集団で襲いかかり、毒牙を突き立てた。あるいは湖の近くにある森林で、硬質植物から果実を取ろうとし、そこを縄張りとするより大型の飛翔生物に追い払われた。

しかし住居が完成しないまま、大型の肉食性歩行動物の襲撃に遭い、あつさりと群はばらばらになった。三人はそれぞれ望遠鏡で惑星を走査し、彼らの同族を探した。

「いました」

歪鎖が見つけたのは、先ほどより大きな群だった。彼らは平原に場所を定めると、付近の森林から硬質植物の幹体を調達し、住居の建設を開始した。今度はあつさりと完成し、百体ほどがそこに住み着いた。

「あれは燃烧プラズマか」

夜間になると、彼らの住居の前に植物を燃烧させたプラズマが灯されるようになった。肉食性動物を追い払うためだろうか。獲物の肉をその火で焼いてから食す個体も見られた。

「彼ら、何か変わってますよね」

「ええ。これほど整然とした建造物を作る生物もめずらしいです」

「燃烧プラズマをいろいろなことに応用していますね。学習能力がすごく高いのかな」

三人は感想を口にするが、この違和感の正体を上手く掴むことはできなかった。しかし、この生物が何か特別な性質を持っていることは、直感的に分かった。

しばらく星系を見学して回った後、歪鎖と傳灯は自分の星系に帰還した。残った揺波はしばらく例の住居性飛翔生物を観察し、《思種》に報告を上げてみることにした。

しかしそれは、とても甘い見通しであった。

「彼ら、知能を持っていますね」

無人機探査機が採集したサンプルとデータを検分すると、平炎はそう言った。平炎がその住居性飛翔生物のことを聞きつけて《燦洋》星系に飛んできたのは、十数年前のことだ。

「知能？ 私には複雑なだけの本能行動に見えるが」

揺波は聞き返す。

「これはその範囲を超えていると思います。たとえば燃烧プラズマの利用についてです。この程度の温度の環境では、燃烧の発生と維持には相応の手間がかかります。また酸素濃度の高い大気中では、不慮の延焼を起こさないために適切な管理が必要です。これだけでも、彼らが一定の知能を持っている証拠になります」

「でも、知能の発生はすごく確率の低い事象なんだろう？」

揺波には未だに信じられなかった。揺波は少なくとも四十億年は播種家をしているはずだったが、生命に知能が発生したという事例

は記憶に無かったのだ。

「はい。しかしゼロではありません。これまでに播種が成功した天体は一兆個ほどありますから、知能の発生が一例ぐらいあってもおかしくは無いと思います」

《悟風》と名付けられた彼らの発見から三千万年。《澄晶》の地表に小型探査機を下ろして彼らを観察しているうちに、随分と時間が経過していた。

増殖周期がわずかに二十年の彼らにとっては、三千万年というのはとてつもなく長い時間だ。実際、この三千万年の間に二十七種族いた彼らの種は八種族まで減ってしまった。一方で、人口は二十倍に増加していた。いくつかの種が飛翔能力を失い、地上での生活に適應して大型化した。

「しかし、彼らが知能を持っていたとして、それでどうなるんだ」

揺波は言った。

知能そのものはありふれた存在だ。市販されているし、知識があれば誰でも作成することができる。《悟風》が知能を持っていたとして、それが憂慮するほどのことだとは思えなかった。

平炎はしばし黙考した後、答える。

「彼らは進化ではなく学習によって能力を向上させ、文明を発展させるだけの知能と意思を持っています。彼らの文明が今度どう発展するのか、正確には分かりません。しかし、あと十万年もすればこちらの存在に気付くと思います。彼らが接触を試みってくる可能性も高い。その時にどうするか、考えた方が良いと思います」

「《苛鳴》の《黄焰》は小型探査機に気付くと、火花を飛ばして威嚇してくる。しかし私はそれに返事をしたり反撃したりしたことは無い。それと同じように考えてはいけないのか？」

「それも選択肢のひとつです。しかし、彼らには人類に匹敵する水準の物質的・精神的文明を構築する潜在能力が存在していることは留意するべきだと思います」

「彼らは人核を有しているのか？」

「人核そのものではありませんが、それと同等の価値のあるものを有していると思います」

「ふーむ」

揺波は平炎をまじまじと見た。

「なぜ、彼らのことについてこれほど真剣になるんだい？」

平炎を構成する千隻の播種船は一瞬だけ停止すると、何かを気恥ずかしく感じたのかサツとスラスタを吹かせて後じさった。それから、声を潜めて言う。

「すいません、他人の星系のことにあれこれと口出しして」

「構わない。私の手に余っていたところだったし」

「では、僕の研究のことから話をしましょう」

「君の研究は、確か、えーと」

「原始人類についてです」

「そうそう。それがどうしたんだい？」

「既知の全ての自己複製系の自然発生確率を調べ上げたいんです。そして、確率的にこの宇宙に自然に発生し生命に進化し得る自己複製体が、RNAの一種類しか無いことが分かりました」

「つまり、原始人類はRNAから進化したということか」

RNAはリボヌクレオチドがホスホジエステル結合により連鎖した炭素質高分子である。酸化水素溶媒・炭素基盤の創種によく用いられる自己複製系で、《澄晶》に生息する種の三分の二はRNAから進化していた。

平炎は肯定する。

「はい。しかし、同時にRNAの自然発生確率も非常に小さいことが分かりました。二百二十七億年の宇宙の歴史を通じて、観測可能な宇宙全体で一回あるかないか、という確率です」

「生命の自然発生は二度は起こらないと」

言われてみればその通りである。生命が自然に発生するなら、播種などしなくとも宇宙は生命に満ち満ちているだろうし、播種者の体内で勝手に生命が増えていそうなものである。

揺波が内容を咀嚼するのを待ってから、平炎は言った。

「そしてここからは僕の推測です。原始人類はこのことを知ったから、人類の末裔のひとつに、播種の本能を持たせたと思うのです」
「ふむ」

播種者がなぜ播種の習性を持つのかは、未だによく分かっていない。ほとんどの播種者は播種を素朴に『良いこと』『楽しいこと』『嬉しいこと』だと思っており、それを他の人類種族に不思議がられている。宇宙環境保全を唱える思想樹と対立することも多い。

しかし、観測可能な宇宙で生命は一度しか誕生しなかったという事実は、ひとつの導線を与える。

半徑数百億光年の観測可能な宇宙に、自分たちだけ。

共通の祖先を持つ同属の他に、この宇宙には誰もいない。

そのことを知れば、原始人類がどのような生態の生物だったとしても、『寂しい』と感ずるのではなからうか。

だから、宇宙に種を播くことにした。寂しいから、寂しくないように、この宇宙を生命で満たそうとした。

「原始人類に感情移入し過ぎていて、という批判は妥当です。ですから結局は揺波さんの意思次第です。しかし可能なら、人類の末裔と新種の知的生命の接触を、あなたに達成して頂きたい」

揺風は原始人類の末裔として、生命と正面から向き合わなければならぬ。それが原始人類と同じ、誕生したばかりの知的生命であるなら尚更だ。

「分かったよ。だけど、そう言われてもなあ」

揺波は大きな溜息をつく。

それから十万年ほどの間に、《悟風》の文明は急速に発展していった。各群の人口が一気に増大し、巨大で複雑な建物を造るようになった。身体に布片を纏う種族が表れた。海辺から砂漠、赤道から極地にまで進出し、それぞれの環境に適応した布片や建物を短時間のうち

に生み出した。また他の種類の生物を飼育し、持続的な食料調達を可能にした。一方で群族や種族の間で戦争が起り、何千何万という《悟風》が死傷した。そんなことを繰り返しながら、文明は洗練されていった。

やがて化石燃料が発見され、文明の発達は加速した。産業機械が開発され、輸送機械が開発され、惑星の隅々まで高度な文明が行き渡った。一方で急速な文明の発展の結果、戦争が激化し環境が悪化した。一時は文明の存続が危ぶまれることもあった。

そんな中で細々と続けられていたのが、宇宙進出のための研究である。彼らが早期に宇宙に進出できる可能性は、初期の段階では否定されていた。惑星の重力の大きさを鑑み、これを振り切れるような推進装置が開発できるのは数十世代先とされた。

しかし、諦めない者もいた。彼らは《垂絹》を使えばより簡単に宇宙に進出できると唱えた。《垂絹》とは、惑星の赤道上空十キロメートルの位置に六本が垂らされた、束ねられた細い糸のような構造物である。観測により、《垂絹》は高度十二万キロメートルの静止軌道から垂らされていることが分かったのだ。《垂絹》が何なのかは不明のままだったが、航空機で《垂絹》の下端に取り付いてこれをよじ登れば、簡単に宇宙まで行けるのではないか、というのが諦めない者たちの主張であった。

その構想は紆余曲折のうちに試行され、成功した。種族国家のひとつが《垂絹》に昇降装置を設置し、三人の《悟風》を宇宙に送り込んだのである。また彼らは《垂絹》を使って様々な物体を宇宙に上げ、惑星を周回させたり、衛星を探查させたりした。

これは科学的には大きな業績であったが、同時に最後の戦争の始まりでもあった。

宇宙からなら、惑星のどこでも監視できるし、攻撃できる。これを他の種族国家が歓迎するはずが無かった。同時に、自分たちも同様の優位を手に入れようと、あの手この手で《垂絹》を手中に収めようとした。六本の《垂絹》を巡る闘争が始まったのだ。

この闘争はそれまで燻っていた源話問題や種族問題にあつという間に飛び火し、巨大な戦争が巻き起こった。

人口の二割が死滅したその戦争が終わると、彼らは荒廃した世界の再建を始めた。

その中で、資源の不足が問題となった。戦争で地下資源が無節操に使われ、枯渇しかけていたのだ。

そこで、宇宙に存在する資源が注目された。

観測により、星系の第四惑星には莫大な量の炭化水素が存在することが判明していた。炭化水素は燃料にも材料にも使える。それがほぼ無尽蔵と言って良い量、存在するのだ。《垂絹》は静止軌道を挟んで惑星の反対側にも伸びていて、そこから遠心力を使って飛び立てば楽に第四惑星に到達できる。第四惑星には《垂絹》のような物体は存在しなかったが、第三惑星よりも重力が小さいので楽に帰還できそうだった。

第四惑星への無人探査が行われた。次いで、第四惑星への有人探査が行われた。以前から存在は知られていた第四惑星の生命と、彼らは初めて対面した。数度の探査によって炭化水素の採集方法と輸送手段が確立され、第四惑星からの資源採集が始まった。

また、各惑星と小天体群で有用な資源が発見され、《垂絹》を使って宇宙船が送り込まれた。彼らは莫大な資源を獲得し、社会の再建を加速させた。社会の再建により宇宙進出も活発化し、この循環に乗って彼らは星系の隅々にまで拡散した。

彼らが外郭小天体群に遺棄された無数の巨大構造物を発見するのは、それからしばらく先のこととなる。

揺波と平炎、それに離扇は、《燦洋》から十光年ほど離れた無人の星系に停泊していた。彼らの周囲には、無数の雑多な播種船と構造物が浮遊している。揺波が《燦洋》から撤収した船と機材である。燃料の都合上撤収できなかった荷物もあり、それは《燦洋》の外郭小天体

に遺棄してきた。

平炎が、《燦洋》に残してきた小型偵察機から受信したデータを見ながら行った。

「戦争、終わったみたいですよ」

「それは良かった。こっちは引越しまでしたのだから、あっさり滅んでもらっては困る」

「それもそうです」

「あとは隕石衝突や火山噴火が心配だな」

「形成から四十億年経って惑星軌道も安定してますし、一通り掃除もしてきましたから、大規模な天体衝突は起きないでしょう。火山噴火の方も、ニュートリノ撮像装置で見た限りでは兆候が見られませんでしたし」

「二十億年前にニュートリノ撮像装置を過信してあいつらを滅ぼしかけた記憶があるんだよな……」

結局、揺波は《悟風》と接触しなかった。原始人類に感情移入した揺波はさらに、同じく原初の知的生物である《悟風》を原始人類と重ね合わせた。その結果こう思ったのである。

「俺たち、《悟風》から見ると滅茶苦茶怖いんじゃないか？」

現在の揺波の総体は、全長百メートルから十キロメートルまでの播種船が十萬隻。加えてドックヤードなどの大型機材が百万機。惑星に定住する全長〇・二メートルのちっぽけな動物から見れば、恐怖の対象でしかないはずだ。

揺波は平炎と協力して各種の播種船や構造物を系外に搬出する算段を付け、近所の星系に移動したのだった。銀河互恵体には《燦洋》を揺波の所持星系として登録し続けるつもりだから、他の播種船が侵入する心配は無い。《悟風》が成長して、十萬隻の播種船さえ恐れられない存在になったら、そのときに接触するつもりだった。

まあ、一時的に逃げたと言っても間違いではない。

「せめて《垂絹》を惑星間移動に使うところまでは行って欲しいですけど……。あ、使ったみたいですね」

荷物と共に系外に出る直前、揺波は《悟風》の文明にある制限が設けられていることに気付いた。《澄晶》は岩質惑星としては比較的大きく、直径は二万五千メートル、質量は七×十の二十五乗キログラムもある。この惑星は重力が大きく、簡単には他の惑星に行けないのである。相当に文明を発達させないと宇宙に存在する膨大な資源を利用できないのは、彼らにとって大きな足かせだ。

そこで、置き土産として六基の軌道エレベーター《垂絹》を残していくことにした。これがあれば《澄晶》周回軌道はもちろん、他の惑星の軌道に到達することもできる。うっかり壊されたりしないように、基部は上空に浮かせておいた。

「揺波さんは、これからも播種を続けるんですか？」

平炎が尋ねてきた。
揺波は答える。

「この星系を買い取って、播種をしようと思う。《悟風》がここまで来られるようになったらご対面だ。《燦洋》星系の資源や生物のデータを提供すれば仲良くなれると思う。それほど時間はかからないんじゃないかな」

揺波は観測機器を《燦洋》に向ける。

今頃彼らは、あの星系に育まれたたくさんの生命と遭遇していることだろう。人類の先祖にはできなかったそれを存分に堪能して欲しいと、揺波は人核の底から思った。

《終》

「みなさん、本日はキャンパス・ツアーにようこそ〜！」

女性の明るい声が南大澤の地に響き渡る。ツアーガイドの楽しいな声色は、ゴーストタウンのように人気がない駅前ロータリーには些か不釣り合いに思われた。風に吹かれて、何かの団体の啓発ポスターやビラが足元をかすめていく。

「本日のガイドを務めさせていただきます、サユリ。タマセです！よろしくお願いいたします〜！」

ガイドのタマセが僕らに向かって笑いかける。それに対し、僕らツアー参加者十名は曖昧な笑みを返した。それを確認するや否や、タマセは目印の小旗を手に、僕らの先頭に立って歩き出す。

「さてさて、それでは早速、今回のツアーの目的であるキャンパスへ向かいます。安心ください、ここから徒歩十分もかかりませんので〜！」

僕らは緩やかに集団を形成しながら、タマセについて歩き始める。参加者はみな背丈も年齢もバラバラで、その中で一際小柄な僕は、どこか緊張していた。隣とぶつからないように、かつ遅れないように、歩幅を気持ち大きくして歩く。背中には重たいバックパックがのしかかり、僕は早くも今日一日バテずにいられるか心配になった。俯きがちに歩く僕の耳に、またもタマセの声が届く。

「あつ、だんだん近づいてきましたね〜。今皆さんの左右に見えますのは、四ツ井ショッピングモールと呼ばれた巨大商業施設跡地です！ご覧の通り、現在はツタ属をはじめとする様々な植物が縦横無尽に生い茂っており、立体交差する廢墟と自然の見事な調和をお楽しみ頂けます。もう少し奥に入っていきますと、ウツボカズラの仲間も生息しており……」

あんなに喋りながら歩いてても、タマセは息切れひとつ見せない。ツアーガイドというのは存外タフなのだろうか。残念ながら僕には景

色を楽しむ余裕などなく、他の参加者の肩越しにジャングルじみて背の高い濃緑を見やるしかできなかった。僕がゼイゼイ言いながら歩いている間もタマセは喋り続け、やがて一際強い語調で紹介を締めくくった。

「……そして！ ショッピングモール中心地を抜けますと、目前に見えてくるのは堂々たる佇まいの長い階段！ これこそが本ツアーの入り口、キャンパス正面階段ですね！」

その声に励まされるように顔を上げてみると、確かに僕らの目の前には横幅の広い階段が長く奥まで続いていた。キャンパスまで直線上に伸びる階段と、その周囲を巡るような螺旋状のスロープは、なかなか美しい。その階段とスロープの遥か下には、案の定、鬱蒼とした緑が一面に広がっている。僕は、崩落しかけていたであろう橋を後から必死に補修して、本来の面影を残そうとしている試みを含めて美しいと思った。洒落た手すりも細工の施された欄干もない一見無骨な作りは、当時の文化の名残を感じさせる。荘厳さなど必要ない、ここが人間に学問を掲げた場所であったという名残を。

*

腕時計を見ると、午後五時を過ぎたところだった。僕らはキャンパス―公立首都大学東郷・南大澤キャンパス跡地―の中央に佇む旧図書館で一時の休憩を取っていた。ここを含め、学生課、食堂など的一部施設は今でも懐かしい発電機が置かれ、ツアー客らのささやかな休憩所となっているとタマセは言った。

「この蛍光灯の白い明かりも趣がありますよね〜」

二階、三階部分は整備が行き届いておらず、埃をかぶった書物とカビの温床らしいが、吹き抜けが設けられた一階部分はそれなりに快適だった。学生向けのパソコンがあつた名残か、床にはコードが通っていただろう小さな穴が点在している。誰もいないカウンターには、ツアー側の備品と思しき器具が代わりに積み上がっている。

「夕飯の準備は六時頃からの予定です。昼間に仕掛けた罫がうまく
いつているといいですね〜！ あ、勿論、何もかかっていなくてもお
夕飯はありますよ！」

参加者から期待の歓声が上がった。それもそのはず、このツアーの
メインは夕飯（恐らくはバーベキュー）だからだ。僕も空腹だったた
め、その知らせは喜ばしい。しかし――

「緊張する？」

突然横から声をかけられ、僕の心臓は飛び跳ねた。

「あつ、そんな驚かせるつもりじゃなかったんだけど」

隣に腰掛けていた男性は、そう言つて僕に人懐こい笑みを見せた。
「ごめん、馴れ馴れしかったな。俺はツツミ。このツアーの常連で、
初心者っぽい人を見るとつい構つちやうお節介焼き。よろしくね」

ツツミがタマセに手を振ってみせると、確かに慣れた様子でタマ
セも旗を振ってみせる。一連の流れから親しさが伺えた。

「それで、君はこういうツアー初心者っぽいけど、合ってる？」

僕は、彼のあまりの親しみやすさに若干の怯えを感じながら、小さ
く頷く。ツツミはやっぱり、としたり顔で矢継ぎ早に質問を投げかけ
てくる。

「名前は？ なんで参加しようと思ったの？ 荷物重そうだったけ
ど疲れてない？ あ、ワクチン打ったよね？ 友達とか一緒に来て
る？ ジビエ系の料理食べた経験は？」

なんとという情報量なのだろう。これが、会話のフットワークが軽い
ということなのだろうか？ 慣れない僕にはただただ――つらい。

「そっか、シモトくんは料理じゃなくて狩猟の方を見に来た感じか」
一通りの説明が終わり、僕はやっとツツミの質問責めから解放さ
れた。ツツミはどこかがつかりしたような表情を浮かべたが、すぐに
気を取り直して話を続ける。

「いや、でもさ、これをきっかけに学食の良さに気づいてもらえれば
俺も嬉しいし！ てことで、今日の夕飯は色々君の手伝いをしても

いい？」

僕が頷くと、ツツミはころっと嬉しそうな表情に戻った。そしてひ
とまず、靴を脱いで足を伸ばし、疲労を回復するところから始めるこ
とになった。

「学食はさあ、よく人肉とか感染食とかってバカにされるけど、普通
に美味しいんだよ。要は内臓をちゃんと取ればいいだけで……」

ツツミはそう言いながら、自身のタブレット端末でアルバムを表
示してみた。

「ほら、これ前にビーフシチューっぽく調理した時の写真なんだけ
ど、美味しそうだろ？」

画面に表示された茶色のスープの中には、ニンジンやジャガイモ、
ブロッコリーなどの乱切り野菜と、ゴロゴロと贅沢に投入された肉
が湯気を立てて映り込んでいる。確かにパツと見は素晴らしいデ
ィナード。しかしどうしても、画面下に小さく表示された関連写真に目
がいつてしまう。サムネイルでわかる、赤く大きな肉塊。ツツミも僕
の視線に気がついている。

「あ……こっちはそうだな、解体の時の写真」

「やっぱり、その、いくら美味しくても……人型、なのが、気が引け
る要因でしょうね」

「人型っていうか、本当に人だったんだらうけどなあ」
ツツミもどこか遠い目で答える。

「でも、もう理性は俺たちと違うんだし、意識だつてほとんど寄生虫
の方が本体だ。やっぱり俺は動物だと思うよ」

「寄生虫って、彼らの体細胞に共生したつていう生物のことです
か？ ミトコンドリアに近いとかいう……」

「そうそう。実際は虫じゃないんだらうけどさ。むしろ冬虫夏草か
な？ いや宿主は至極元氣だけど……難しいな」

「言いたいことはわかりますよ」

数十年前の日本に突如現れた、人に寄生する生物。それに寄生され
ると、人は落ち着きなく動き回り、汚水や廃棄物を食すといった異常

行動を始めたため、一時はそれこそバイオハザードだと言わんばかりの大騒ぎになった。が、行方不明者こそ多数あったものの、明確な死亡者は出ず、不思議と感染も収束していった。一説では、感染者達は集団で人里離れた僻地に生息地を定めたとも言われた。そして、数少ない痕跡や皮膚片などから、その寄生生物は驚異的なスピードで人間の体細胞と共生したのではないか、という荒唐無稽にも思える理論がウエイ教授によって発表されたのはつい十年前の話だ。

「それならもう俺たち人間とは別種だと思っただよ。だって俺たちは、人様の家のゴミ漁ってプラスチックまで食う訳ないし、やりたいたとも思わない。そんなの食って生きていけるのもおかしい。見た目が似てても別の生き物として扱っべきだ」

実際近年になり、かつての感染者たちの子孫と思しき個体が、ここ南大澤を始めとする東郷都西部で見られるようになった。ゴミを漁る害獣のような形で、だ。

「だから人間に害を為す動物はこうして駆除すべき、と？」

「まあね。騒音の被害もあるし。もちろん調査の協力は惜しまないし、いい感じにお互い住み分けられるならそれに越したことはないと思うけど、しばらくは無理そうだよなあ」

あいつらも声帯はほとんど同じはずなんだから、喋ってくれたらいいのに、とツツミがぼやく。人間の既存の言語を使わない、というのも動物と見なされがちな一因だと思っただよ。僕は、だからといって思考までも浅はかだと考えるのは違うと思っただよ。それは未だ解明されていないことなので、彼らの思考や生活、感情については何も言えない。それでも、思いを馳せるところもある。

「彼らは殺される時に痛みや恐怖を味わうんでしょうか？」

こんなことを言っていると、狩猟反対派に思われそうだと自分でも思った。彼らの狩猟反対と人権擁護を掲げる組合がいくつが存在しているのは知っている。動物として扱った上で、愛護を訴える団体も都の西部にはあると聞く。遠回しにツツミを非難しているように聞こえないかと心配になる。しかしツツミはあっけらかんと答えて

くれた。

「どうだかね。けど、もしあいつらが人間と同じ感覚でそういうのを味わうんだとしたら、そこは楽に殺してやる腕の見せ所ってやつじゃない？」

ちよūdōそれを聞いたところで、タマセが出発の時間がもうすぐであることをアナウンスした。皆荷物を持って各々立ち上がる。僕も靴をしっかりと履き直し、罾を設置し終えて軽くなったバックパックを背負った。先ほどよりは随分気が楽になったものの、やはり僕の顔は強張っていたらしく、ツツミがポンと僕の肩を叩く。

「まあそう気負わず、気楽にいこうぜ。ほら、人間は好きだろ？ きちんと殺して残さず食ってやるのが食べられる側への礼儀だーってやつ。あんなもんでいいんだよ、多分な」

図書館のゲートをくぐり、僕は獲物を求め出発した。

*

大学跡地で狩猟した、人間に似た生き物―発見者にちなんでウエイ亜人間とも呼ばれる彼らを、その場で捌いて食するジビエ・ツアー。それがこのキャンパス・ツアーだ。そうとわかっていても、いざ生きている亜人間を前にするとやはり緊張した。

「おーおー、今日もよく鳴いてんな」

旧図書館から出てすぐの所にある旧学生ホールには、あまたの亜人間が生息している。かつて学生サークルが利用していた多くの小部屋を巣にしているらしい。今のところ亜人間はこの大学跡地内でしか行われていないため、学食という名前もここから来ている。

昼間はホールも静かだったため、本当にここに亜人間がいるのかと半信半疑だったが、陽が沈んでくると確かにグラグラと笑うような声があちこちから聞こえてくる。声だけ聞くとかなり人間の笑い声に近く、耳に障るといふ話も納得する。

「在学生の行方不明者が多すぎて閉校した大学にその子孫が大量に

住んでるっていうのは、帰巢本能なのかね」

「今までは僻地にいたらしいのに、急にこんな住宅街近くに戻ってきたのは不思議な話ですよ」

ホールの二階部分をぐり抜けながら僕らはキャンパス入り口付近に仕掛けた罠へ向かう。ホール内には亜人間の排泄物や吐瀉物が落ちていることがある、と聞いていたが、幸いにも今回は遭遇せずに済んだ。やはり、そういうものはできれば見たくないものである。そう考えていた矢先に、ツツミがぼつりと言った。

「たまに落ちてる汚れ物も、結局は自分たちで食って分解してんのかね」

それまでの人間には見られなかった、ゴミや汚物をも食する雑食性を身につけた亜人間は、寄生物との共生によって分解者の働きをも得たという説がある。人工の化学物質さえも分解できる、自然界きつての存在なのではないかとも言われる。その話自体は面白いし、現代環境への適応という側面からも興味があった。が、食事の前にそれを話すのか、と内心で思ったのもまた事実だ。

「……あ、ごめん、俺は肉が美味しければなんでもいい派だからさ。忘れて」

「いや、その、可食部部分には影響ないそうですし、その……僕も気にしないようにします……」

そう、たとえ汚物を食べていようが、それが通るのは消化器系だけ。感染能力がまだ残っている可能性があると言われるのは脳や生殖器などの臓器だけだし、肉の部分には共生生物によって作られた、人間とは異なる栄養素から成る赤身があるだけだ。人肉でもないし、アンモニア臭もしない肉だ。そう自分に言い聞かせながら、ドーム状の覆いが残る広い通路を抜ける。

「あ！ みなさん見えますか？」

タマセは急に、しーっと口元に人差し指を当てながら、僕らにだけ聞こえる声量で話す。

「昼間仕掛けた罠の周辺に、亜人間たちが集まっていますね。あの石

造りの門の奥です。芝地の真ん中辺りに結構います。今日は多いですね」

暗闇に目をこらすと、確かに芝地にはいくつかの亜人間のグループが見受けられる。僕らが昼間に罠を張った地点でも、亜人間たちは平気で歩いている。罠はきちんと作動しているのだろうか？ 今更ながらに僕は不安になってきた。罠といっても、僕が担当したのはとても簡易な箱罠だ。ツツミや他の参加者と分担して、金属製の底板や側板、天板、レンチなどを必死に運んできた僕らは、昼間にそれを組み立てて芝地に設置した。箱罠というと、箱の中の餌につられて獲物が入ってきたところをガシャンと閉じ込める一般的な罠だが、流石にこんな平地では亜人間もかからないのでは、と思っていた。しかしツツミ曰く、春は開けた平野でもある工夫で亜人間が狩れる変わったシーズンなんだそうだ。というのも、

「あれはハナミと呼ばれる亜人間の習性です」

日本人の行う花見に似ていることからその名が付けられたハナミは、亜人間たちの行う独特なコミュニケーションのことだ。春になると亜人間たちは、餌や情報を共有するグループや、冬の繁殖期に向けたつがい形成すべく、ハナミを通じて大規模な交流活動を行う。それは決まって開けた平地で、衣類やビニール袋などで作られたシートの上で夕方～夜半にかけて行われる。ハナミとは言うが、桜などの花があるかは関係なく、敷物の上で互いに鳴き声を上げながら食事を行うことが重要らしい。この時に特に好まれるのがアルコールだ。多ければいいという訳でもないようだが、一部の実験では、アルコール飲料がある場合とない場合とではハナミの長さや集まる個体数に有意な差が出るとされる。

そこで今回の罠では、ポリエチレン製の大きめのブルーシート（およそ十二畳程度）を芝地に敷き、そこに青く塗装した箱罠と、中に餌となるアルコール飲料とノンアルコール飲料を半々ずつ置いた。甘めの紅茶や乳酸菌飲料といったノンアルコール飲料をいくらか混ぜることで、雌の個体もかかりやすくなるとツツミは言っていた。経験

則、というものだろう。芝地の周囲には小さめのドライソーサーやチーズを置き、その匂いに惹かれた亜人間たちが芝地に集まるよう誘導してみた。

結果、目の前では大規模なハナミが行われている。共感を表すと考えられているゲラゲラ声や、好意を示すとされる手叩きが各所で上がる。

「既にいくつかの箱罨には泥酔した亜人間がかかっていますね。もう少しすればハナミも終わるでしょう」

タマセの言う通り、今回のハナミは真夜中まで長引くことはなく、次第に亜人間たちは散り散りになって数を減らしていく。春の終わりがけや夏に見られるハナミは、もっと長引くそうだ。この騒ぎが夏の夜中まであるようでは、近隣住民からの苦情も出ようというものだ。彼らにとつては必要な活動だろうが、夜行性の亜人間と昼行性の人間は相性が悪い、としかいえない。

「もうそろそろいいでしょう。移動しまーす」

タマセを先頭に、僕らは芝地へ踏み入る。足元には、亜人間が巢から持ち込んだと思しき食べ物の残飯も転がっている。ブルーシートを踏みしめて緩やかな坂を登っていくと、確かに僕が仕掛けた箱罨の中で、一体の亜人間がだらんと寝転がっている。他の罨にも手応えがあったようだ。

「お。いいな、かかっているじゃん。あつちで俺が試してたくくり罨は全部ダメでさー」

「ご覧の通り、とツツミは大きく広げられたワイヤーの輪を見せる。くくり罨は地面に埋める輪状のワイヤー罨で、獲物が罨の上部を踏むと、地面から飛び出した輪が獲物の足首を締めつけて離さない仕掛けになっている。箱罨よりも獲物の行動を読んで設置する必要があるため、僕は仕掛けなかった。

「やっぱり手先が器用で集団行動してるから、上手いこと仲間と協力して外しちゃうみたいなんだよね。箱罨の方は助けられないみたいなのに、不思議だな」

「寝ている個体は無視するんですかね」

「あーそうかも。確かに、こんな泥酔した亜人間一体を巢まで運ぶなんて大変そうだし、勝手に起きるまでほっとくのかね。結構薄情っていうか、合理的？　つていうか」

言いながら、ツツミは止めさしのための電撃器の準備を進める。近くの学生課などに電力が供給されているのは、このバッテリーを充電するためでもある。

「シモトくん、これやりたい？」

フランクにゴム手袋を差し出しながら、ツツミが笑う。

「い、いや、僕は……遠慮します」

「そう？　超初心者でもできるんだけど……じゃあ今回は俺がやっちゃうね」

慣れた手つきでゴム手袋とゴム長靴を履いたツツミは、箱罨の間から足錠をつけた長い木の棒を差し込み、泥酔した亜人間のだらんと垂れた右足首に開いた錠の内側をぶつける。それがスイツチとなり、足錠は勢いよくバネの力で亜人間の足を締めた。それを確認してから、錠の後部から抜けた棒を回収する。足錠にはワイヤーが取り付けられており、近くのコンクリート柱にきつく結び付けられている。

「これだけやっても起きないんだから、こいつはもう暴れたりしないと思うけど……前に捕獲した亜人間が起きて暴れた時があつて、その時は保定がもうすごい大変でさ」

思い出話をしつつ、ツツミは亜人間の左手首にも錠をつけ、反対側の柱にワイヤーを固定する。一連の保定作業はつつがなく終わり、これで完全に亜人間の体は拘束されたことになる。つまり、いよいよ電撃器の出番ということだ。ツツミが道具を取りに行く。僕はその少しの間だけ、亜人間の寝顔を見つめる。檻が閉まったことにも、錠がつけられたことにも気づかないくらいに酔っているのだろう。赤くなった頬には涎が伝っている。ぐーぐーと心地よさそうにいびきをかいて眠っている。人間も亜人間も、酔っ払って寝る時は同じような顔

をするのだと思った。ビニール袋に穴を開けたような簡易な服を着た亜人間は、今から殺されることも知らずに目の前で眠っている。その手足も顔立ちも、どこにでもいそうな普通の人間のように思われて、僕は奇妙な気分になる。中身はもはやまるで違うというのに、どうして外見ばかりがこうも人間のままなのだろうか？ 人間に襲われにくくする擬態の一種なのだろうか。

そんなことを考えている間に、ツツミは用意しておいた二本の長い細い槍のような電極針とバッテリーを持って帰ってきた。

「俺も昔イノシシ猟をしてた時は銃で止めをさしてただけ、電撃器は資格もいらないし血も出ないし便利だよ」

心臓を挟むように、二本の電極針を上半身と下半身の筋肉に突き刺すことで、電撃が亜人間の体を通り失神ないし絶命させるようになっていくと聞く。今回は脂肪の少ない首と脛を刺すことになった。だらしない寝転がる亜人間に狙いを定めるのは至極簡単で、僕が心の準備をする前にツツミは針を勢いよく二箇所突き刺す。それは奇しくも、うと、と亜人間が微かに瞼をもたげた瞬間だった。

およそ一分程度、ツツミは亜人間に電流を流した。電気が流れたであろう瞬間に、亜人間の全身は小さく跳ね、そのまま手足は宙に固定されたように動きを止めた。大した音も光もなく、静かな一分間がゆっくり流れていった。そろそろか、とツツミが針を引き抜くと、亜人間の体は完全に脱力し、だらりと力なく芝生に横たわる。一見すると、先ほど寝ていた時と変わらないように思えた。

しかし、その半開きの目が瞬きをすることはもうなかった。ツツミがその死体を檻から引っぱり出すまで、僕と死体の目は合ったままだった。あつけない死を、しかし僕はその虚ろな目から、ひひしと感じていた。

*

「と、まあこんなもんかな」

ツツミがそう言うって腰を降ろす。今僕の目の前には、広めの作業台の上で綺麗に捌かれた亜人間の枝肉があった。二の腕や太もも、ロース、バラといった大まかな部位に分けられた、赤と白のマーブル模様の肉が転がっている。これだけ見ると、スーパーで売っている牛肉とさほど変わらないように感じる。ただし僕の足元には、取り出した内臓や余計な脂肪を捨てていっばいになったバケツがあり、その辺りはスーパーとはまるっきり違う。

時刻は九時を回った頃だ。ハナミを狙うツアアは夕飯の時刻が遅くなりかちなのが大きな欠点と聞いていたが、本当に解体というのは時間がかかる。特に他のグループは皮剥ぎに手間取っているようなので、ツツミはそちらのヘルプに向かった。内臓、特に消化器系を傷つけてしまったグループは、内容物が肉について大変そうだ。タマセも洗うのを手伝っている。

僕は細々とバーベキューの準備をしながら、ひとつながりに美しく剥がれた亜人間の皮と、そこに丸ごと切り落とされてくつついたままの顔を眺めた。壁のフックに吊るされて干されている。脳も内臓もこの後研究資料になるそうだ。一部には、顔や皮部分の熱心な収集家もいると聞いているが、僕はこれらを大量に部屋に吊るしたいとは思わない。逆さに吊られた顔とはもう目が合わず、この個体が生きていたという感覚も薄れていく。ノコギリで胸骨を開かれて内臓をまとめて引き抜かれた時も、脂を切り取りすぎないよう繊細に皮を剥がれていた時も、ずっと同じ虚ろな顔をしていた。後半は、壁に吊るされたまま、自分の背骨がゆっくり外されていくのを黙って見ていた。生気の抜けた、という表現がしっくりくる顔つきだった。今だって、僕がその肉を焼くためのグリルを用意しているのを静かに眺めている。

僕はその寡黙な視線を背に、表に出た。

着火剤のオレンジの火が黒炭に移っていく。パチパチと心地よい音がする。

「はあ〜疲れた！ グリルの調子どう？」

解体作業を終えたツツミが旧三号館の正面玄関から出てくる。内部は電気が通っているものの、自動ドアまでは動いておらず、ツツミは古びて重たいドアを鬱陶しそうに押し開ける。

「お！ いい感じじゃん！ 腹減ったからもう焼き始めたいくらいだわ」

「温度的にはいけなくもないかと」

僕がそう返すと、ツツミはいそいそと亜人肉を袋から取り出した。

「ちよつと早いけど、焼くか！ 肩ロース！」

肉に塩胡椒を軽く振り、オリーブオイルも塗りつける。それを火の強いところで表面を炙ったのち、アルミホイルに入れて弱火で二、三十分ゆつくり加熱する。それが完成する頃には、他のグループも作業を終え、皆で食事にありつくことができた。無骨なエプロンと血塗れの手袋を外したタマセも、嬉しそうに肉と野菜をグリルに乗せていく。

「どうだった？ 今回のキャンパス・ツアーは」

グリルに炭を足しながら、ツツミは僕に話しかける。

「……色々と考えさせられる経験だった、と言ったら月並みでしょうか」

「初めての学食なんて、みんなそんなもんじゃない？ 肉食つてみたら、また色々考えるかもしれないし」

ほんとはレバーとかハツも食いたいんだけどなあ、とツツミが笑う。

「早く安全性が証明されるといいですね」

「出来れば、生レバーまでOKしてくれたら最高なんだけど！」

本当に学食が好きなのだろう、ツツミは今日一番目を輝かせている。そんなに美味しいものなのだろうか。

「亜人間の肉って、ちよつと塩辛いんだよね。それで程よく歯ごたえがあつて……これがもう酒に合うんだわ……」

僕はギリギリ未成年なので酒は飲めないが、その恍惚とした表情

を見ていると、酒との組み合わせもまた美味なのだろうと思われた。

実際食してみた感想も概ねその通りで、アルミホイルで焼いた亜人肉は、振った塩胡椒の割にはしっかりと塩味がついていた。よく高級な肉は甘みがあると云うが、むしろこちらは塩気があつた。貝や魚の塩気とも違う、香辛料的な風味が感じられる。何を食べたらこの味の肉になるのか、つくづく不思議に思われた。噛みごたえがあり、肉汁もそれなりにある。

「どう？ 美味しい？」

ツツミが僕に問いかける。僕は肉をしっかりと咀嚼しながら頷く。疲れた後の塩味はなおさら美味しく感じられた。

「気に入ったら是非また来てくれよ、なっ」

缶ビールをおりながらツツミが笑う。また来るかどうかは、僕が今日のこの体験を今後どう思い出すかによるだろう。美味しかった、楽しかった、と思えたならまた来るだろうし、やはり解体するのは気が引ける、と思つたならもう来ないだろう。今の僕にはまだそれはわからない。それでも、この料理が美味しいことは今後もずっと変わらないだろう。

「ツツミさん、今日もありがとうございました」

肉と野菜をバランスよく乗せた皿を持って、タマセが僕らの会話に加わる。気にしないで、とツツミも笑って返す。

「今日の個体は良かったですね〜！ 皮を持って帰っちゃいたくないイケメンさんでした！」

……タマセが、件の亜人間皮愛好家だったという意外な事実が明らかになったものの、僕は深く追求しない。彼女なりの美的感覚があるのだろう。ほんのりと酒で頬を紅に染めたタマセは上機嫌のようだし、至極嬉しそうに今日の皮の良さを話す彼女は、ツツミの熱烈的な学食愛にも似ている。そういう点でこの二人は気が合うのだろう。僕も、そこまで嬉しそうに喋る二人の姿を見ていると、自然と好感が持てるというものだ。話の内容に共感できるかは別として、僕も横で話を聞かせてもらう。

そうして、ほろ酔いになったツツミとタマセの様々なツアー話を聞いているうちに、キャンパスでの夜は更けていった。

*

キャンパス・ツアー。それは学食と、その食材であるウエイ亜人間を自分の目で確かめるツアーである。生きた亜人間やその習性を感じ、直接捌くツアーである。

運がよければ、かつての大教室で寝て過ごす亜人間や、旧学生ホールで楽器を嗜む亜人間さえ見られるツアーであり、自分好みの学食に出会えるかもしれないツアーである。

新参者の僕は、またタマセとツツミに会えるだろうか？ 答えは明確で、僕が望む限りきつとまた会えるだろう。僕がこの南大澤の地に足を運び続ける限り、彼らはいったって、そこにいるのだ。そう、彼らの愛する亜人間たちと共に。

※

真新しい制服に身を包んだルカイヤは、ドゥーガン先生の後を追って廊下の上を滑っていた。低重力に慣れていないルカイヤに配慮したのか、ドゥーガン先生の速度は非常にゆっくりだ。実際、ルカイヤは床のステップを蹴るタイミングと力加減を計るのが精いっぱい、あまり速度が出せずにいた。

しばらく進むと、曲がり角に突き当たった。ドゥーガン先生は壁に設置されたバーを掴み、進行方向を変える。ルカイヤはバーを掴み損ねたものの、先生が手を掴んで体を引き寄せてくれたため事なきを得た。

ルカイヤは姿勢を整え左右を見回した。地球の学校とあまり変わらない風景だ。廊下の左右に教室の扉が並んでいる。扉の上には教室の名前が書かれた表札が掲げられていた。

ドゥーガン先生は『2-B』の表札が掲げられた扉の前まで進むと、壁のグリップを掴んで体を止めた。同じくグリップを掴もうとしてつんのめったルカイヤの体を、ドゥーガン先生が優しく引き留める。ドゥーガン先生はルカイヤを振り向いて何か言った。

ダヴィダ語の発話がアラビア語にリアルタイム翻訳され、ルカイヤのコンタクト端末に表示される。

「ここが2-B。あなたのホームルームよ」
ルカイヤは頷く。

ドゥーガン先生がセンサーに触れると、扉が開いた。教室の中からざわめきが聞こえる。ドゥーガン先生は前を向き直り、2-Bの教室に入っていく。

ドゥーガン先生が入るなり、教室が静まり返った。ルカイヤもドゥーガン先生の後を追って、教室に滑り入る。

教室の中の様子も地球の学校とよく似ていた。床に二十個ほどの机が並び、前の壁には大きな電子ボードがある。違うのは机が高いことと、椅子が無いことぐらいだろうか。生徒たちは床から突き出したフックに足を引っかけ、体を固定していた。

先生の後ろから見慣れない女子が出現したことに、生徒たちは興味津々の様子だった。視線がこちらに集中している。ルカイヤの緊張が高まり、思わず視線を足元に落とした。

「みんな、おはよう」

ドゥーガン先生が生徒たちに向けて言う。ルカイヤは電子ボードの前で止まるうとして、床に足を着けて、踏ん張ろうとした。

「あ、」

彼女が低重力での生活を始めてから、すでに三ヶ月が経つ。だから今の動作が失敗だったことにすぐに気付くことが出来た。しかしその後はどうすることもできなかった。

高重力環境で床に足を付けて踏ん張れば、踏ん張る力と同じだけの垂直抗力が上向きに発生し、垂直抗力に比例する摩擦力が後向きに発生し、体が前に進むのを止めることができる。床に足を着けた際の反作用は、重力よりも十分に小さいので問題にならない。

しかしここは0・0093Gの低重力環境だ。勢いよく床に足を着けると、重力よりも十分に大きな反作用が発生してしまう。結果として体が浮き上がってしまうのだ。

「わあっ！」

気が付いたときには、ルカイヤの足は床を離れていた。しかも上半身の速度を保ったまま下半身の速度を落としたため、空中で体が前転していく。床に手を伸ばすが、宙を掻くだけだった。

重力が小さいので、投げた物体が落ちるまでの時間も長い。ルカイヤの体は無様に倒立しながらゆっくりと上昇していった。手足をばたつかせるが、手足の届く範囲に掴めるものは無い。

この時、ルカイヤの頭があつたのは床から二メートル足らずのところだったが、半ばパニック状態に陥った彼女は床が遙か彼方に行つてしまつたように錯覚していた。

「あわわっ！」

「ルカイヤさん?!」

ドゥーガン先生が慌てて先端の曲がつた長い棒のようなものをこちらに伸ばしてきた。ルカイヤが棒を掴むと、先生はそれを下に引つ張る。ルカイヤの体はゆっくりと落下を始めた。

ルカイヤの手が床に着くと、ドゥーガン先生はその真下の床からフックを引つ張り出し、彼女の手に握らせた。ルカイヤはそれを両手で必死に掴み、体を床に引き寄せる。膝が床に着いた。

「はあ、はあ……」

フックを掴んだまま、土下座のような姿勢で息を整える。落ち着くと、教室の生徒たちがざわついているのが聞こえた。歩くことも止まることもままならない変な女だと思われたのだろうなと、絶望的な気分になる。

顔を上げると、心配そうなドゥーガン先生の顔があつた。

「もう、大丈夫、です……」

握っていたフックを離し、それに右足を引つ掛けると、ルカイヤはゆっくりと立ち上がった。生徒たちの顔を見るのは怖いので、顔を上げることは出来なかつた。

ドゥーガン先生がルカイヤの隣に立ち、言った。リアルタイム翻訳の結果が、ルカイヤのコンタクト端末に表示される。

「彼女は今日からこのクラスに加わる、ルカイヤ・アルファイドさんです。ルカイヤさんは地球のナイルから来ました。ダヴィダでの生活にはまだ慣れていないということなので、みんな仲良くしてあげてください」

再び教室が騒めく。ドゥーガン先生の言葉が気を使ったものであるのは分かつたが、ルカイヤにとってはひたすら屈辱だつた。

※

今日の授業を終えたルカイヤは、クラスメイトとの親睦を深めるのもほどほどに学校を出た。歩道の両脇に立つポールや地面に並ぶステップを慎重に蹴りながら、自宅に向かう。ルカイヤの家は学校にほど近く、徒歩で通学することが出来た。

速度は非常にゆつくりだ。ルカイヤの隣を初等生と見られる子供が抜かしていく。少し屈辱的だが、上手く止まらずに建物や車道に頭から突つ込むよりはよほど良い。

ルカイヤが住むケンドール市は、小惑星ダヴィダの地中に掘られた直径二キロメートル、天井高二十メートルの円盤状の空間の中に築かれている。人口はおよそ八万人と、小惑星ダヴィダの都市の中では二番目に多い。炭素産業が盛んな町で、周辺の諸都市と共に工業地帯を形成している。

照明が配置された低い天井の下に、建物が規則正しく並んだ空間は、地球育ちのルカイヤには圧迫感を感じさせた。建物と建物の間には、この都市を取り囲む壁が見え隠れする。

目の前の信号が赤になつた。ルカイヤは横断歩道の手前に並ぶポールの一本を掴み、体を止めた。

横断歩道を、磁動車が駆け抜けていく。形は地球の自動車に似ているが、車輪が無い。車道に埋め込まれた超伝導磁石の力で、滑るように走っているのだ。

ルカイヤはふと、周囲の建物を見渡した。重力の影響を考慮しなくて良いためか、どの建物も華奢な印象を受ける。中には地球では絶対に成立しないような形状の建築もあり、はす向かいのカフェはなんと逆三角形をしていた。

またどの建物も、道に面した壁にはバーやグリップが取り付けられていた。建物のデザインと調和するように取り付けられているのに感心する。

信号が青になつた。ルカイヤはポールを蹴り、再び滑り出す。横断

歩道を渡り終えたところで足が地面に着きそうになったので、地面を小さく蹴って高度を上げた。

子供を連れた女性と擦れ違う。子供がこちらを見ていたような気がした。自分の歩き方がおかしくないか不安になってきて、他の歩行者を見回した。

ほとんどの人は上半身を上、下半身を下にして、滑るように歩道を進んでいる。まるでスケートをしているみたいだ。空気抵抗で速度が落ちると、爪先で地面を小さく蹴って加速する。中には急いでいるのか、上半身を前、下半身を後にして、ポールを強く蹴りながら猛烈な速度で進んでいる者もいた。

自分の歩き方は他の歩行者と比べてそれほど変ではないという自己評価を下したが、やはり周りの視線が少し気になった。

三十分ほどかかって、自宅に辿り着いた。標準的な二階建の建物だ。地球にいた頃の自宅より広いので気に入っている。センサーにプレスレット端末をかざすと、玄関の扉が開いた。

「ただいまー」

家の奥に向かって言うと、妹のナディアが居間から飛び出してきた。玄関から居間に続く廊下を、壁を何度も蹴りながら突き進む。さながら弾丸のようだった。その勢いのまま、ナディアはルカイヤに抱き着いた。

「ぐわー」

混然一体となったルカイヤとナディアは、勢いよく背後の扉に激突し、跳ね返された。ナディアはまだ十二歳で体重も軽いはずだったが、リュックサック越しの背中にながりの衝撃が走った。

「こら、ナディア、あぶない」

「おかえりー。学校どうだった？」

ルカイヤに組み付いたナディアが無邪気に尋ねる。ルカイヤは玄関に浮かびながら、泣き顔を作ってナディアを抱きしめた。

「もー、疲れたー」

「よしよし。お姉ちゃん、まだふわふわに慣れないもんねえ。歩き方

とか赤ちゃんみたいだし」

ナディアがルカイヤの頭を撫でる。

「赤ちゃん言うな。ナディアこそこのふわふわで何でそんなに上手く歩けるんだよー」

事実、姉であるルカイヤより妹であるナディアの方が低重力での身のこなしは遥かに上手かった。父親と母親も既に小惑星人と比べて遜色ない身のこなしを身につけている。一方のルカイヤは、三ヶ月前に地球を出てからここに来るまでの間、宇宙船の中で何度も怪我をしかけ、ここに来てからも自然な身のこなしをなかなか身につけられずにいる。

「今日も最初から失敗しちゃってさー」

言いながら朝の出来事を思い出し、涙が出てきた。やっと補助なしで街中を移動できるようになったところなのにこの失敗だ。絶対に陰で笑われている。恥ずかしい。

放課後には地球出身の転入生という珍しさからか、たくさんのクラスメイトに話しかけられたが、早く切り上げて学校を出てしまった。今後、学校で友人を作ることはできるのか、今になって心配になってきた。

「ううー」

無言でルカイヤの頭を撫で続けていたナディアが、頭をポンと叩くとルカイヤから離れた。

「ま、元氣出しなよお姉ちゃん。後で一緒にプリン食べよー」

「ナディアちゃんマジ天使ー」

悲観的になりがちな性格なので、ナディアの樂觀的な性格には救われる。ひとまず、自室に戻って体を休めることにした。

ルカイヤは玄関の天井に開いた縦穴を通って二階に上がった。重力が小さいダヴィダでは、二階に上がるのに階段を用いる必要はほとんど無い。

自室の扉を開け、滑り入る。部屋にはベッドとデスクと本棚が置かれていた。小物はまだ少なく、少し素っ気ない印象だ。

ルカイヤはリュックサックを壁のフックに掛けると、ベッドに潜り込んだ。ベッドは封筒のような形状で、掛布団が敷布団に固定されている。

緊張が解けると眠くなってきた。帰宅してすぐに寝るのは勿体ないような気がしてカード端末を取り出すが、チャットをするような友人もまだいないのであまりすることが無かった。地球に残してきた友人はいるが、地球との通信時間は長いし通信料金は高い。

うとうとしながら配信動画を見ていたが、何度か瞬きをするうちに眠りについてしまった。

※

体育館のコートを、運動着姿の女子生徒たちが滑っていく。その手には先端が湾曲した長い棒が握られていた。ゼロGホッケー用のスティックだ。

生徒の一人が、転がって来たボールをスティックで打ち返し、他の生徒にパスした。受け取った生徒(確か名前をラオディカと言った)は腕に覚えがあるらしく、スティックでボールを保持しながら地面を細かく蹴り進む。

相手チームの生徒が追いかけるが、彼女はそれを軽快な動きで躲した。ドリブルでゴールを囲むサークルに侵入すると、スティックをボールに強く打ち付ける。ボールは猛スピードで転がるとゴールキーパーの脇を通り抜け、ゴールに滑り込んだ。

ラオディカは爪先を地面に触れさせて徐々に勢いを殺し、停止した。

審判をしていた体育教師のラウラウア先生がブザーを鳴らした。ルカイヤはと言うと、試合の動きを追うことも出来ずに自陣の内側でちょこまかとしていた。

ゼロGホッケーのコートは平面だ。足がかりになるステップはコートの外縁にしかない。だから移動するためには体が浮き上がらな

いように注意しつつ地面を爪先で蹴るしかない。

何かの拍子に体が浮いてしまわないか心配で、試合どころではなかったのだ。

再びブザーが鳴り、試合が再開した。ルカイヤは今度こそ試合に参加しようとボールに注意を向ける。ルカイヤのポジションはディフェンダーだ。ゼロGホッケーどころかフィールドホッケーの知識も無いが、恐らくサッカーのディフェンダーと同じように動けばいいのだろう。

そう考えた矢先に、相手チームの生徒(名前は確かマリオン)がドリブルをしながらセンターラインを越えてコートの内側に向かって来た。先程ゴールを決めたラオディカと同じぐらい見事なドリブルだ。

ルカイヤは右足で慎重に床を蹴って、緊張で固まった体を前に進める。マリオンにぶつからないように注意しながら接近し、ボールを狙って横合いからスティックを突き出した。

マリオンはそれをひらりと躲すと、ゴールの前に躍り出た。ルカイヤは背後から回り込み、スティックを上から打ち下ろすようにしてボールを取ろうとする。

そこで失敗に気が付いた。スティックを床に打ち下ろした反動で体が浮かび上がってしまった。マリオンは驚きつつもボールをヒットし、シュートを決める。

ブザーが鳴った。

ルカイヤの体は無様に回転しながら上昇を続けていた。女子生徒たちが失笑しているのが聞こえる。

「こらこら、笑わない」

ラウラウア先生が真面目な顔で注意しながら、先端の曲がった長い棒をこちらに差し出してきた。これはコロッドと言って、低重力環境で人間の背丈よりも高く浮かんでしまったものを回収するための道具らしい(人間相手に使うことは滅多にないらしいが)。ルカイヤを引っ張りながら、ラウラウア先生が言う。

「地球と小惑星では歩き方が全然違う。まだ来たばかりのルカイヤが上手く立ち回れないのは当たり前だ。だから笑わないこと。君たちだって地球では上手く歩けないんだから」

ルカイヤは床に降り立ち、ラウラウア先生に礼を言った。

それからしばらくして、試合の前半が終了した。ルカイヤは他の生徒と交代して体育館の隅に身を寄せた。低重力に体をゆだねるとどつと疲れが出た。

数学の授業も歴史の授業も地球の高等学校とはほとんど変わらなかったが、体育の授業だけは違った。小惑星での運動は地球上での運動とは体の動かし方が全く違う。これまで使ったことのない筋肉が疲労していた。

それにここで行われるのはルカイヤの聞いたことのない、低重力に適応したスポーツだ。ゼロGホッケーはダヴィダでは誰もが知っているスポーツらしかったが、ルカイヤは新たにルールを覚えなければならなかった。

ルカイヤがぐったりとしていると、二人の女子生徒が滑り寄って来た。ルピタ・ガテギとフィロ・キバキだ。昨日の放課後に少し話した仲だった。

「ルカイヤちゃん、さっきは大変だったねー。みんな笑うことはないのに」

ルピタが言った。

「低重力でもだいたいぶ走ったり滑ったりできるようになったと思っただけどなー」

ルカイヤは頭を抱えた。

「まあ、みんな小さい頃に一度はあややって浮かんで行っちゃうことがあるから、気にしないで」

フィロがにやにやしながら言った。

「私は赤ちゃんじゃないんですけどー」

ルカイヤは頬を膨らませる。フィロの言葉はからかい半分ではあったが、不快ではなかった。

「実際、先生が言ったように私らが地球に行っても上手く歩けないんだろーな。地球って重力あるんでしょ、重力」

「え、何それ」

「フィロ知らないの？ 地球だと体がすごい力で地面に押さえつけられるらしいよ」

「えー、何それー？ 地球人ってみんな這って進んでるの？」

「地球人は重力に慣れてるから、ちゃんと立って歩けるらしいよ」

「えー、すごい。もしかしてルカイヤちゃんって超力持ち？」

「まあ私たちよりは筋肉あるんでね？」

母親に聞いたところによると、小惑星人は体重が軽く、身長が高い傾向にあるらしい。実際、ルピタもフィロもルカイヤに比べて随分と背が高かった。羨ましい。

一方で筋力は地球人が小惑星人に大きく勝る。ケンドール高等学校で腕相撲大会をすれば、ルカイヤが圧勝するはずだ。これはあまり嬉しくないが。

隣に座っていたフィロがルカイヤの肩を抱いてきた。

「じゃあ次に笑われたら殴っちまおうぜー。ルカイヤの地球人筋力なら一発KOでしょ」

「地球人筋力って何」

「天井まで殴り飛ばしちゃうよ。小惑星人だって一度浮かんでしまえば天井に着くまで自力で降りて来られないし」

「それ大変だねー」

「小惑星ではときどき酔っぱらったおじさんが空中を漂ってたりするんだよ。自力では地面まで戻れなくなって警察や消防のお世話になるの」

「なんだそれ」

体育の授業の残り時間は、彼女たちとの会話に費やされた。

※

体育の授業を終え、女子更衣室で着替えていると、一人の女子生徒がルカイヤに近付いてきた。黒く短い髪と黒く細い目を持つ、小惑星人にしては小柄な東洋系の少女だ。教室の隅の席でボード端末を眺める姿が印象的な生徒だったが、名前はまだ知らない。

彼女は、ルピタとフィロが目を丸くする横でルカイヤをロツカーに押し付けるようにして立つと、暗く低い声で言った。

「君、部活入ってる？」

「ブカツ……？」

確か、ダヴィダの高等学校にある、学校が主催し生徒が参加するクラブのことだ。ケンドール高校には文化系から運動系まで幅広いクラブがあると聞くが、まだ転入したばかりなので入部を考えたことも無かった。

「まだ入ってない、よ……？」

「それなら放課後にドラムボールコートまで来て。運動着を着て」

「ふえ……？」

「それじゃ」

戸惑ったルカイヤは変な声を上げるが、少女は気にしない。それだけ言うところりと踵を返して、もと来た方向に滑っていく。彼女の背中はずぐに他の生徒たちに隠れて見えなくなってしまう。

三人は茫然としたまま、後に取り残された。

「えーと、彼女は？」

隣のルピタに聞くと、彼女は首を傾げた。

「あの子はモチツキ・カワイデって言って……」

「コミュショーってやつ？」

フィロが付け加えると、ルピタが頷いた。

「まあ、うん。時々ボソッと鋭いこと言うから一目置かれてはいるんだけど、自分からはあまり他人に絡もうとしないよね」

「あの子、部活一筋だもんねー」

「そうそう」

「んー、放課後、行った方がいいのかなあ？」

ルカイヤが尋ねると、ルピタが返した。

「まあ、行かなくても怒らないと思うよ。そういう子だし。でもあの子が自分から他の子に絡むなんて滅多にないから、行ってみると面白いかもよ」

「そうかー、それなら行ってみるかー」

ルカイヤは着替えを終える。お喋りに夢中で手が進まないルピタとフィロの着替えが終わるのを待ち、三人で教室に戻った。

※

授業時間が終わり、生徒たちが廊下に舞い出る。

高等生たちは街中の人々のように遠慮しないと、壁に設置されたステップやバーを蹴ったり引いたりして縦横無尽に飛び回る。たくさんの生徒たちの動線が絡まり合い、ルカイヤには何が何だか分からない。それでも生徒たちは互いにぶつかることなく目的の場所に移動していく。

運動着に着替えたルカイヤは、生徒たちの嬌声や罵声が飛び交う中を、壁伝いに渡されたバーを手繰り寄せながらゆっくりと移動していた。

他の生徒とぶつかりそうで怖い。

とりあえず、モチツキに指定された「ドラムボールコート」に向かうことにした。カード端末に表示させた校内地図を眺めながら、慎重に歩を進める。

「ルカイヤ・アルファイド」

背後から声をかけられた。モチツキが近付いてくる。彼女は運動着とは違うスポーツウェアを着て、右肩にはラケットのケースを掛けている。

「カワイデさん……？」

モチツキはルカイヤの左腕を掴むと、両足で壁を蹴った。ルカイヤの体が引つ張られ、壁から離れた。

「付いてきて」

「えっ待っ」

その言葉には耳を傾けずに、モチツキはルカイヤを引っ張って行く。飛び交う生徒たちの間を縫って校舎の西端まで移動すると、縦穴を通って一階に降りた。

モチツキに引っ張られたルカイヤは、途中で何度も人や壁にぶつかりそうになった。必死に体を捻ったり壁を蹴ったりして避けなければならなかった。

体育館の脇を通り抜けると、人気がない通路に出た。「ドラムボールコート」の表札が掲げられた扉が、ぼつんとあつた。

モチツキはそこでやっとルカイヤの手を離す。

ルカイヤは空中を漂い、息を切らしながら言った。

「もー、私、速く走れないんだって！」

「今で誰にもぶつからなかったんだから大丈夫だと思う」

「そういうことじゃなくて……」

そこに背の高い女性が現れた。ラウラウア先生だった。

先生は静かに滑ってくると、モチツキに微笑みかけた。

「ルカイヤさん、連れてきたんだ」

「はい」

「何て言って誘ったの？」

「放課後、ここに、来てって」

モチツキが無表情で答えると、ラウラウア先生は噴き出した。

「それはなんとも……。ルカイヤさんごめんね、この子、強引なところがあつて」

「堪能させていただいております」

ルカイヤはむすつとして返す。

「嫌だったら帰っても良いのよ」

「せっかくなので見学していきます」

「良かった」

ラウラウア先生は扉にプレスレット端末をかざし、開錠した。

三人が扉の中に入る。

そこは、奥行き二十メートル、高さ五メートル、幅三メートルほどの縦長の空間だった。左手の壁にはベンチが据え付けられ、右手の壁は透明なガラスで覆われている。

ガラスの向こう側に目を凝らすと、右手の壁に大きな穴が三つ開いていることに気が付いた。直径五メートルほどの大きな円筒形の横穴が三つ壁に並んでいる。

近づいてみると、穴の奥行きは十メートルほどもあつた。まさに大きなドラムの内側のようだ。

背後からラウラウア先生が話しかけてきた。

「ドラムボールは二十世紀中期に、初期の小惑星開拓者たちが故障した遠心回転ドラムの壁にボールをぶつけて遊んでいたのが起源らしい。その後、地球から輸入したテニスラケットが使われるようになり、スカッシュを参考に公式ルールが定められた」

「あ、スカッシュなら知ってます。やったことはありませんけど」

「ドラムボールは小惑星帯でポピュラーなスポーツのひとつだ。公

共放送でも試合が中継されている」

「あ、結構ポピュラーなんですね」

「ええ。小惑星ではあまり広いスペースが取れないから、団体競技より個人競技の方が人気になりやすいんだ。うちのドラムボール部も部員が二十人ぐらいいる。今日は活動日じゃないから私とモチツキさんだけだ」

「あ、先生までわざわざありがとうございます」

「それじゃあ、どんなものか見せてあげるね」

そう言うラウラウア先生の後ろでは、モチツキが宙に浮かびながら準備運動をしている。

モチツキは準備運動を終えると、ケースからラケットを取り出した。形はテニスラケットによく似ているが、心持ち柄が短い。ラウラウア先生は部屋の奥の倉庫の扉を開けると、三人分のヘルメットとアイガード、ニーパッドとエルボーパッドを引っ張り出してきた。

「そんな重装備でやるんですか？」

「無重力でラケットを振り回したり飛び回ったりするスポーツだから、結構危ないんだ。選手同士がぶつかることもあるし」

準備が終わると、二人はガラス壁に付いた扉を開けてドラムの中に入った。

二人は左右に別れ、ドラムの両側面に立った。ルカイヤからは、モチツキとラウラウア先生が横倒しになって頭を突き合わせているように見える。

ラウラウア先生がズボンのポケットからボールを取り出し、ドラムの底面に向けて打った。ボールは底面で跳ね返り、モチツキ側の側面で再び跳ね返った。

モチツキは向かって来たボールを打ち返す。テニスよりもラケットの振り方が小さいような気がした。

再びボールがドラムの底面に向かって飛ぶ。当たり前だが、低重力なのでボールはほぼ一直線に飛ぶ。壁でバウンドしない限りは進行方向を変えない。

モチツキの足元を見ると、爪先で壁を細かく蹴って自分の位置を調節している。フックもバーも無いのによく浮き上がらずにいられるものだと、ルカイヤは感心した。

しばらくするとモチツキがラリーを止めた。それを合図にしてラウラウア先生が少し後ろに下がる。

再びモチツキがボールを打った。先程のラウラウア先生の打球よりも鋭い。

先生は二度バウンドしてきたそれを、難なく打ち返す。底面で跳ね返ったボールは、ドラムの下側面で再び跳ね返る。

モチツキは勢いよく壁を蹴り、ボールに向かって跳躍した。空中で体を横に九十度ほど回転させ、壁に着地する。反動で体が跳ね上がる寸前にボールを打ち返した。

ボールは再び底面に当たり、ラウラウア先生のもとに跳ね返る。今度のラリーは先程よりもずっと強い打球の応酬となった。しか

も互いに相手が打ち返しにくい場所を狙って打っている。二人はボールを追って飛び回り、滑り回った。地球上でのテニスとは全く違う動きだ。

時に二人の軌跡は交差し、ぶつかりそうになる。確かにこれなら防具も必要だとルカイヤは思った。

ラウラウア先生が底面の反対側の端に向かってボールを打ち込んだ。底面で跳ね返ったボールはすぐに側面で跳ね返り、ラウラウア先生の足元に向かって戻ってくる。その反対側の側面にいたモチツキはラケットを持った右手を頭上に伸ばして猛然と跳躍するが、間に合わなかった。ボールはラケットのヘッドのすぐ上をすり抜けてドラムの口のガラス壁に当たった。

モチツキは左手を使って着地する。ラウラウア先生がガラス壁の扉を開け、モチツキと共に前室に戻って来た。モチツキがルカイヤに聞く。

「どうだった？」

「どうだったってこれ低重力初心者にやらせるの？！」

ルカイヤは叫ぶ。先程モチツキとラウラウア先生が見せた円舞のようなラリーを、自分が真似できるとは思えなかった。しかしモチツキはにべもない。

「飛んだり跳ねたりは小惑星人なら慣れれば誰でもできるようなから、地球人でも大丈夫だと思っ」

ラウラウア先生がスポーツドリンクのチューブを口につけながら言った。

「モチツキさんとしては、地球生まれで筋力があるルカイヤさんにドラムボールをさせてみたいんだって」

「はあ」

「地球生まれのトップ選手は小惑星帯にも多いんだ。小惑星生まれには鍛えにくい筋肉が鍛えられていて、筋力も体力もあるから。他の運動部もみんなあなたを狙ってたの」

「え、私狙われてたんですか？」

「一週間ぐらい前に、地球人の転入生が来るっていう情報が漏れたんだ。でも初日にあなたが低重力に慣れていないことが分かったから大半の運動部が興味を失くした。そこをモチツキさんが掻っ攫ってきたわけ」

「そ、そうなんですか」

本当に勝手なものである。

ラウラウア先生がラケットのグリップをこちらに向けた。

「それで、やってみる？」

ルカイヤは頷き、グリップを取った。

「まあ、せっかくなので」

ルカイヤは準備運動をすると、各種防具を装着した。モチツキと共にドラムの中に入る。モチツキがドラムの左側面に、ルカイヤがドラムの右側面に、それぞれドラムの中央に頭を向けて立った。

頭上のモチツキがルカイヤにボールを放ってきた。掴んでみると意外と柔らかい。

ドラムの外からラウラウア先生が呼び掛ける。

「まず壁の名前。前にあるのがフロントウォール。上と横と下にあるのがサイドウォール。このガラスがバックウォール。次に線の名前。あなたの前にあるフロントウォールに平行な線がショートライン。あなたとモチツキさんの間に引かれている、フロントウォールに垂直な二本の線がサイドライン。フロントウォールの中に描かれている丸がサービスサークル」

「んー、なんとなく分かりました」

「サービスはショートラインの後ろにあるサービスポックスから打って、サービスサークルの中でバウンドさせて、サイドラインの向こう側のフロントウォールとショートラインの間に当てればオーケー。大丈夫かしら」

「あー、そこらへんはテニスやったことがあるので大丈夫です」

「じゃあ行ってみよう」

「握りはテニスと同じで大丈夫ですか？」

「私はテニスやったことないから分からないけど、たぶん大丈夫だと思っ」

お互いに知識のあるスポーツが違うと意思疎通が難しい。それにダヴィダ語の翻訳は相変わず人工知能に任せているので、心もとない。とりあえず地球でやったテニスの記憶を手繰り寄せ、グリップを握り直す。

サーブの打ち方を聞いていなかったが、先程のモチツキと同様にテニスのアンダーサーブのように打ってみよう。

そう思って、ラケットを持った右手を後ろに引いた。左手でボールを浮かべる。地球上と違ってボールが落下しないので、アンダーサーブだけならテニスより簡単そうだ。

ラケットを振る。ボールがラケットの面に当たり、フロントウォールに向かって飛んで行った。ラケットを振った反動で体が回転してしまい、そのせいか思ったほど球速が出なかった。

サービスサークルはフロントウォールの中心に描かれた直径三メートルほどの円だ。決して小さな円ではないため外すことはないと思っていたが、ボールはサービスサークルのルカイヤから見て上に当たった。

「あれ」

跳ね返ったボールをモチツキが取りに行ってくれる。ラウラウア先生が言った。

「たぶん、無意識に重力による落下距離を勘定してしまったのだからな。もうちよつと低めに打つことを意識してみよう」

モチツキからボールを受け取り、再びサーブを打った。今度はサービスサークルの内側に入る。ボールはバウンドしてサイドウォールに当たり、モチツキに向かっていく。

モチツキはそれをラケットにバウンドさせて受け取った。

「じゃあ今度はモチツキさんのサーブを打ち返してみよう。サーブの後はどこに打っても大丈夫。テニスと同じでボールを二回以上バウンドさせると失点。あ、相手がサービスのときレシーバーはもうち

よつと後ろに下がった方がいいよ」

ルカイヤは先生に言われた通りにした。

モチツキがサーブをする。どういっわけか、胴体があまり回転していない、美しいフォームだ。ボールはフロントウオールに当たると、サイドウオールでバウンドしてルカイヤに向かってきた。

ボールめがけてラケットを振る。反動で体が回転する。空振った。

ボールはバックウオールに当たり、宙を舞う。

「地球でテニスをしたことがあるせいかな、やっぱり無意識に重力の存在を想定しちゃうみたいだね。もうちょつとやってみようか」

何度か試すと、ボールを打ち返せるようになってきた。

相変わらず体は回るし狙いはずれているが、モチツキは的確に打ち返してくれる。

「打つときは左手を素早く引くと体が回転しなくて済むよ」

「バックハンドは両手だと腹がよじれるから片手の方がいい」

ラウラウア先生も的確なアドバイスをしてくれる。

結果的に、ゆっくりとした球速ではあるがモチツキとラリーを続けられるようになってきた。

モチツキも乗ってきたのか、ボールを左右に振るようになる。球速も早くなってきた。ルカイヤは頑張って体を左右に動かそうとするが、体を浮かせないように爪先で移動するのは難しかった。

浮かび上がって戻れなくなったり、半回転したりした。高い位置に出されたボールを返そうと飛び上がって、勢い余って反対側の壁にぶつかったりもした。

ルカイヤは何か失敗する度に、滑稽な叫び声を上げたり、笑ってモチツキに助けを求めたりした。

「さて、ここまでにしよう」

先生の声でモチツキがラリーを止める。

ルカイヤもだいぶ疲れてきた頃合いだった。

ドラムを出ると、ラウラウア先生がスポーツドリンクのチューブ

を渡してくれた。

喉が渴いていたので、すぐにキャップを開けて口を付ける。

水分が体に染み渡るようだった。

「今日は来てくれてありがとうだね」

ラウラウア先生が言う。

「楽しかった？」

モチツキが尋ねる。

「うん。楽しかった」

ルカイヤは頷いた。

「ルカイヤは上手くなれると思う。筋力があるから初めてにしては球速が速いし、ジャンプ力もある」

彼女にそう評され、ルカイヤは照れ臭く感じた。

「興味があったらまた来てね。モチツキさんに言えば活動に連れていってくれるだろうから」

残って片付けをするというモチツキとラウラウア先生に別れを告げて、ルカイヤは更衣室に向かった。

久しぶりに良い汗をかいたなと、ルカイヤは思った。

※

「ただいまー」

ルカイヤは帰宅すると、すぐに部屋着に着替えてベッドに滑り込んだ。久しぶりに運動をしたので、かなり疲れたのだ。あまりにも眠かったのでもちゅくサクも放り投げたまま漂っていた。

今日は楽しかった。

やはり体を動かすのは楽しい。地球にいた頃を思い出す。またあの頃みたいに走り回りたいなと思う。

モチツキの誘いに乗ってみようか、と思った。

しかし、ここはほぼ無重力の小惑星だ。地球と同じように走り回れるわけではない。

自分が低重力環境にここまで適応できないとは思わなかった。もつと自由に飛んだり滑ったりできると思っていたのに。

ドラムボール部に入っても、また失敗して惨めな気持ちになるかもしれない。

ブレスレット端末が鳴るのが聞こえ、自分が眠りに落ちていたことに気が付いた。

母親が居間から呼んでいる。寝ている間に帰って来たらしい。

ルカイヤは布団から抜け出し、居間に向かった。

居間には四人掛けのテーブルがあり、既に母のサミーラと妹のナディアが床のフックに足を引っ掛け立っていた。

台所には父のエリアスが立っている。彼の手元には、使い方のよくわからない器具が何個も置かれていた。ダヴィダに越してきて以来、エリアスは無重力向けの調理器具に凝っているのだ。

「今日はこれを使ってみようと思ってるな。ブレスパンというものらしい」

父はそう言いながら調理器具の鉄板の上に食材を並べていく。食材は、農場作物に慣れない家族に配慮してわざわざ工場作物を中心に買い揃えられていた。

宇宙に出て驚いたのは、地球では珍しくなった農場食物を食べる人がまだ多いということだ。特に鶏肉や羊肉といった天然肉を食べるのは、宇宙に出てからが初めてだった。

サミーラによると、宇宙では工場作物の生産設備を整えるだけの技術力と資本力が揃うのが遅れたため、遺伝子改良した農場作物を食べる習慣が残ったのだそうだ。

ルカイヤはナディアの隣の席に着いた。床からフックを引っ張り出し、足を引っ掛けて体を固定する。

「お姉ちゃん、フック引っ張り出すのだいぶ上手くなったじゃん」

ナディアが上から視線で言う。

「はいはいどうせ私は赤ちゃんですよ」

軽くあしらうと、ナディアが頬を膨らませた。

「学校はどう？」

サミーラが話しかけて来た。

「楽しいよ。友達もできたし」

「そう」

サミーラは嬉しそうに頷いた。

ルカイヤは少し考えてから切り出した。

「私、部活に入ろうか迷ってる」

「ブカツ？」

サミーラが首をかしげる。

「学校で入る運動とか音楽とかのクラブだろうか？」

エリアスが台所から答えた。調理器具を動かしているらしく、食材が焼けるジュージューという音が聞こえる。

「あー、ダヴィダでは学校がそういう機会を設けているのね。それでどんな部活？」

「ドラムボールっていう競技なんだけど」

ルカイヤが答えると、エリアスが言った。

「ドラムボールか。こっちでは結構メジャーらしいな」

「そうらしいね」

サミーラとエリアスは物理学者だ。ダヴィダの地表に国際プロジェクトの大型電波望遠鏡が建設されることになったため、その研究員としてケンドール市に移住することになった。娘のルカイヤとナディアは宇宙に出るか地球に残るかを選択を迫られたが、七年前のフレアの影響で地球の情勢が悪いこともあり、エリアスの強い勧めで宇宙に出ることにしたのだ。

「えー、お姉ちゃん、まだよちよち歩きなのにスポーツなんてできるのー？」

ナディアがルカイヤをからかう。

「こら、そういうこと言わない」

「いいんじゃない。ルカ、体を動かすの好きなんだし。何で迷ってるの？」

サミーラが尋ねる。

「だって私、無重力だと全然ダメじゃん」

母の言う通り、私は体を動かすのが好きだ。でも、だからこそ地球とは勝手の違う宇宙での生活に不満を抱いている。これまでほど上手く出来ないことに、恐れを抱いている。

台所のエリアスが言った。

「ルカが楽しいと思っただのなら、やってみればいい。勉強や仕事じゃないんだ。上手く行かなくても、楽しいなら構わない」

「実際にやってみて、楽しかったんでしょ？ ドラムボール」
サミーラに聞かれ、頷く。

「うん。楽しかった」

「晩御飯、できたぞ」

料理を盛りつけた皿を持って、エリアスが厨房から出てくる。皿を覗くと、焼いた培養羊肉と培養野菜が乗せられていた。得体の知れない調理器具だが、出来る料理は美味しそうだ。彼は居間と台所を何度か行き来して皿をテーブルに並べ、自分も席に着いた。

「じゃあ、食べよう」

四人は食事に取り掛かった。

※

終業のベルが鳴る。荷物を持った生徒たちがいそいそと教室から出ていく中、ルカイヤはモチツキの机に近付いた。

「モチツキさん」

声を掛けると、ラケットケースを肩に掛けた彼女が顔を上げた。

少し意外そうな表情をしている。

「モチチー、今日は活動ある？」

尋ねると、彼女はなぜか少し頬を赤らめ頷いた。それから急にいつもの無表情に戻る。

「モチチーはやめて」

モチツキはカバンを肩に掛けると、緩やかな足取りで廊下に滑り出ていく。ルカイヤも少しぎこちない歩調でそれを追った。

○部員紹介(掲載順+α)

ペンネーム

① 所属

② 自己紹介

③ あなたが思うTMU文藝部の魅力

④ 好きな本・ジャンル

の順に掲載しています。

大塚慎太郎

① 都市環境科学研究科

② 院一年生になります。推理小説が好きで、推理小説研究会にも所属しています。

③ 基本的に行動を制限する規範が無いので楽です。本を読むこと、書くことに対してマイナスの意見を持つ人がいません。むしろプラスの人がいっぱいいるので楽しいです。

あとは、所謂サバルチャーというものに詳しい人が多いので、いろんな話ができます。詳しくなくてもみんな教えてくれますよ！

④ 最近の一押しは森川智喜『スノーホワイト』です。「可愛い」小説という宣伝文句を見て手に取ったのですが、とにかく可愛いの一言につきる。白雪姫のお話を元にした推理小説です。女子中学生が探偵役なのですが、推理の方法が魔法の鏡に聞くだけ。ずるいのもまた可愛いのです。卒論終わりの疲れた頭にもスツと効く可愛い小説です。

風影露

① 理学部生命科学科二年

② 趣味は本屋に行つて気になる本を探すことです。読んでみて自分の好みに当たると嬉しくなります。読んだ本をあまり整理しないので部屋に本が積まれる一方です。後先はあんまり考えていません。

③ 居心地がいいです。小説を書けます。本を読む会などでわいわい話したりしながら書いたり読んだりできます。

④ 色々読みます。どちらかというとファンタジーが多いかもしれませんが。最近は蒼月海里と綾崎隼にはまっています。作者買いと文庫買いをよくします。

深山わたる

① 都市教養学部都市教養学科物理学コース↓理学研究科物理学専攻
② 院生です。この冊子が発行される頃には院生になってはいるはずですが、院生ですがときどき文藝部にも顔を出すつもりです。出せたらいいな。院生ですがときどき青衿に原稿を出すつもりです。出せたらいいな。

③ 文藝部の魅力は小説を書けるところです。私は文藝部に入つて初めてまともな小説を書けるようになりました。小説を書いてみたいけど最初の一字が書き出せない、という人には良い場所だと思います。

④ 主にSFを読みます。ずっと追っていた小川一水の『天冥の標』が日本SF大賞を受賞してとても嬉しい。小川一水は面白いし読みやすいし登場人物がかわいいのでオススメです。有名な作品だと伊藤計劃の『虐殺器官』と『ハーモニー』は好きです。あとグレッグ・イーガンを自宅に大量に積んでいます。最近の作品だと伴名鏡の『なめらかな世界と、その敵』は面白かったです。伴名鏡、びつくりするほど文章が上手いですね……。

紺野透

①今で言う経済経営学部経営学コースの四年生

②紺野透と申します。四年生で就活中なので、新入生の皆さんとお会いすることは少ないかもしれませんが、お気軽に話しかけてください！

広く浅くゲームが好きです。たまに部でアナログゲームとかTRPGやっています。

③気楽に過ごせる場所だと思います。最近本読んでない……という人や、なかなか小説書けない……という人もいますし、別にそれで嫌厭されることもないです。

あと、どんな趣味でも引かれませんが、旬ジャンル大好きからマイナーの孤島住みまで、各々が好きなものをのびのび愛でています。

部員同士で趣味の話をする、多様性を感じます。

④一途キャラの清濁と非實在青少年の命乞いが好きです。思い出深い本は乙一の『ZOO』と江戸川乱歩の『孤島の鬼』。

ゲームだと最近では、ボールにしまうとポケットに入っちゃやう不思議な生き物たちのゲームとか、勝算があるソシヤゲとかをやっています。

大和 武蔵

①大学院1年 環境応用化学科

②文藝部は今年で5年目です。部員からは、やたら長い作品を出す人、と思われています。去年から研究室に配属されたので、なかなか顔を出せず幽霊と化しています。

③自分含め、クセが強い人が多いですが、誰かの作品を批判したり馬鹿にしたりする人はいません。思う存分に自分の世界を展開できる環境です。文系理系などを問わず、多方面から部員が集まりますので、どなたでも大歓迎です。

④基本的にはSF・ファンタジーを好んで読みますが、感動すると話題の作品はすかさずエックしています。この本泣けますよ、という作品があれば、ぜひ教えてください。

南蛇井

①法学系法律学コース四年

②初めまして、南蛇井です。「なんじやい」と読みます。原稿を出していないのに自己紹介をするのが心苦しいのですが、今年度は卒業までにもう少し作品を載せることが目標です。

③どんなジャンルの本が好きでも、どんなジャンルの作品を書いても何も言われないどころか布教することすらできる自由度の高いところが魅力だと思います。

④基本的に何でも読みますが、好きな本は米澤穂信の古典部シリーズです。最近では全然本を読めていないので、ミステリーやホラージャンルの読書量を増やしたいと思っています。

奥付

青衿 第五十号
2020年4月15日発行

○執筆者○
大塚慎太郎
風影露
深山わたる
紺野透

○編集者○
西川知里

○発行元○
東京都立大学文藝部
学生ホール 424号室・内線 2446番

○連絡先○
tmulcbungei@gmail.com